

餅のなりたりといふもの少からず。只是のみにしもあらず、國の吉事としてこれを祝す。この祝する下心は貪欲よりおこれり。佛を頼んで極樂へ行きたがるも、先の世の榮華、身には金箔をぬりながら、蓮花の腰かけに半座を分けて、鼻と戯をなし、耳には二十五菩薩の音樂に、豊後<sup>\*</sup>ぶしの艶なるを聞き、口には百味の飲食、金翅鳥の焼鳥、天の邪鬼の糟漬等を食はんが爲なり。木の餅を祝するも、國家の安全を祈るにてはなく、國の吉事といへば我身の上にふりかゝる仕合もあらんかと思ふより、知るも知らぬも祝して曰く、木に餅のなりたるは古今無雙の吉事なりと。夫天吉凶を知らしむるに、なんぞ小兒の戲の如きを以て是をしめさんや。或人曰く、しかれども又其理もなきにはあらず、萬物陰陽に造化す、陰陽不順なれば、よのつねならぬ異物生ず、異物の生ずるは吉にあらず凶なり。後醍醐帝の御宇龍馬<sup>\*</sup>を獻せしを、中納言藤房の卿詳せしも理に當りたるにあらずや。予謂へらく、是も亦陰陽の大なる事を知らざるが故なり。造化のかぎりなき、億萬を以てはかるべからず、豈悉く全き事あらんや。五瓣

の花六瓣に咲き茄子の中著形なる、釋迦如來の黃疸色なる、福祿壽の天窗の長き、鎮西八郎爲朝が弓手の腕の長きも、皆同じく出來そこなひなり。六瓣の花は必ず其實雙仁ありて人を殺す、二子茄子を孕婦食へば二子を産むといふも俗説なり。又最員の方から押して理を付くる時は、釋尊の黃疸は黄金の肌と號す。いかに佛なればとて、體が金ならば、風呂に入り炬燵にあたらば、五體なき金と成つて病者と成るべし。又指を切つて兩替にもやられねば、正眞の金の持ぐさらしなり。殊更夜道の獨旅、盜人の用心悪かるべければ、損有つて益なし。故に我は佛は生れぞこなひの病ひ者と見る事理なきにならず。又福祿壽の天窗が長きとて、南極量の化身といへるも、見て來たものなければ請合ひがたし。爲朝が腕の長きは、弓取と盜人には重寶なれども、つまる處は出來そこなひなり。此類の出來そこなひ今も世に多し。生れ付のかたはもの、葉替りの草木、碁磐娘、熊女、馬に角あるの類、みな出來そこなひにして、ならごうの餅に似たるも、同じ造花の細工屑なり。何ぞかゝる小物を以て國の禍福を論せんや。



(此間闕)又吉凶を知らしむるならば、天地といへる名人の作者に、春夏秋冬といへる上手の細工人の手が揃つて居れば、まだ外に尤らしき趣向も有るべし。是衆人のまどへる事、言を待たずして明なり。去年の春にてか有りけん、江戸西が原といへる所に、木に餅なりたりとて群集せしも、ならの木に付きたる瘤のごときものにて、今年之物とは小異なり。去冬家内に餅のなりたる木は柳なり、此外に餅のなる木の有りやと問は、只稻と答へんのみ。門人笑うて去る。

寶曆十一年辛巳年彌生上の九日

——「六々部集」後編——

註 (一)放屁論

「六々部集」(安永九年)から採つたが、本論は長いために割愛して前編の跋と後編の序だけを出した。「平日閑話」に「安永三年四月、此頃兩國に放屁男を見世物にす。

霧降花咲男と云ふ、大に評判あり、平賀鳩溪作「放屁論」といふ書出る、花咲男といふ繪草紙も出る」とある。何でも三絃小唄淨瑠璃に合せてお尻で歌つたと云ふ。この男は、同年大阪に赴き曲庇福平と名乗つて興行した事。○夷さも 古事記、景行天皇の條。焼津の古地。○霞立つ 霞たつ春の山邊は遠けれどふき來る風は花の香ぞする(古今春) (二)木に餅の生る辨 「六々部集」後編「飛花落葉」中の一文。○つれづれ 兼好「徒然草」の冒頭。○豊後節 元文中、京の文吉なるもの江戸に下り宮古路豊後太夫と名のる。豊後節の祖である。後、文右衛門なるもの、一中節と豊後節とを押し交せて語る。中興の豊後節である。妖艶浮華の曲節と云ふ。○龍馬云々 太平記卷十三、「龍馬進奏の事」藤房彌通世の事」参照

横井也有

妖物論  
百魚譜



也有は尾張藩の重臣横井孫右衛門時衡の子。元祿十五年九月四日、名古屋に生る。幼名市郎平。後に孫右衛門時般と名乗つた。御用人、御番頭、普請組寄合等の職を經、寶曆四年五十三歳で隱居を願ひ、郊外前津に隱栖を作り半掃庵と號した。それから三十年、悠々自適の閑日月を送つて天明三年六月十六日八十二歳で歿した。辭世「短夜や我には長き夢さめぬ」。也有は太平に化育てられたディレクタントンチズム作家であつた。これは時代から見ても還境から見ても、自然の行方である。尾張第七世宗春の豪奢遊逸の時期に當つて、御用人であつた彼は、藩主の頽廢的生活を果して何と見たであらう。二十七歳で「旅論」を作り三十五歳で「俳席之掟」を書いた程の洒脫な也有は、たゞ成るがまゝにのみ任せただけではあるまいか。也有の學問は漢學を小出侗齋を受けたが、俳諧は何人に就いたのか判然せぬ。或は山本荷兮と云ひ或は五竹坊とも云ふが、美濃風の俳諧の盛んな名古屋であるから、いづれ支考の流れを汲んだのであらう。その著作中、「鴛衣」一篇は永く國文學史の寶玉として光つてゐるが、この外にも羅葉集、野夫談、羅窻集などかなり多い。方面は、俳諧の外、詩集、歌集、狂歌集、八文字屋風の戯文等あつて、行くところとして可ならざるはない才人の面影が覗はれる。

## 妖物論

世に妖物といふものありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、月代そりたるはつひに聞かず。夜ばかり出づるはいかなるゆるぞと、或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさにと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にとれば、その藝ことに出來榮して、武功の人に出あはすれば、思ひの外のおやまちをかうむる。鬼は伯母に化けて腕をとりかへし、狐は叔父にばけて畏の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらんは、その姿をかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また河童はたまゝの沙汰なれども、その正體の穿鑿は、樂屋の見えておもしろからず。たゞ理屈なき妖物と



いふものこそ、ことにゆかしけれ。そもく神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來邊なるを、此妖物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なれば、三才圖會にもせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表紙の小双紙にはづかしき姿はとゞめられける。さるに、昔今の美婦國色すら、身の終はみぐるしく、關守におちぶれ、檜垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬鬼が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見てもうるさきに、たゞこの物の終ばかり、引幕の陰をもたのます、あとに箒も雑巾もいらす、かきけすやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

## 百 魚 譜

「人は武士、柱は檜の木、魚は鯛」とよみ置ける、世の人の口における、己が

さまざまなる物ずきはあれども、此魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。糸かけて臺にするたる男振さへ、外に似るべくもなし。然るを唐土には、いかにしてか殊に賞翫の沙汰も聞えず、是に乗りける仙人もなし。されば夷三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、たゞ是にこそ釣もたれ給へ。龍を鱗の司といふは、食味はなれたる理屈にして、さば是を料理せんと學びたる人は、昔愚なる名をもこそとゞめたる。

龍門瀧にのぼらんとする魚有りて、おほけなくも大聖の御子にも、此名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ばんとす。かれは如何なる幸にかあらん。味ひ美なりといへども、鯛の料理の品々なるには似るべくもなし。乾物炙物にせず、鱈清汁すましによるしからず、くづし蒲鉾かまぼこに用ひ難く、鹽にも酢にも調せず。只刺身あつ物にとゞまるは、多能をはづといひけんを、中々譽と思へるにや。昔平家に悪七兵衛景清と名乗りて、今民間には泣子をも威すべく、朝比奈辨慶にも肩をならべんとす。しかるに記録の上にしては、鰻曳の外はさせ



る働なくて、只二郎兵衛も五郎兵衛も同じ列なる侍なり。いかに世に名の事々しきぞと、ある人評したるものあり。かれたゞ七兵衛が類なるべし。

松江の名産、我朝にも品くだらず。張氏は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家は是を船中に得て宮路を進む。進退いづれをか羨むべき。

鮒は近江に洞庭の名をくらへたる、鯉に似て位階おとれり。名には紅葉をかざしたれど、鱠は春の賞翫となれり。

鮒は節饗お比もてはやされ、梅咲くころを世に匂ふ。

鯖は初秋に祝はれて、空也の蓮の葉に登るは、後生善處の契もたのものし。

鯉は芥子酢の風味、上戸は千金にかへむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性を兼好に言ひ探されたる、いと口をし。鯉節となりては、木の端のやうにも思はれず、その梢にも見えすして、花の名をさへ世に散らしぬる。

鮫鱈の唐めきて仔細らしきに、つるし切とはいふせくして、架紘が料理めきたり。かれは本汁にえられ、鱈はかならず二の汁の大將にて、搦手をぞ承り

ぬ。

もし文字の理屈によらば、紫の上には鱗をめでさせ給ひ、中宮の御膳にはここに鮒をや召させ給ひけん。

鯉は越路に名ありて、其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たま〜鱒といふものも、その色は負けじとや挑むらんを。

狭夜姫は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非常となり、これは非常の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも、劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふもの世にもてはやさるゝは、かの鯛鱸の大魚に比すれば、今いふ梅櫻の類と等し。しかるに、國俗のとなへ異にして、しろ魚としら魚ともいへり。是いづれならんといふに、さればしろ魚としら魚ともいへば、しら魚といふこそよからぬめといへ



ば、かたへの童のさし出で、否とよ、世にしら猫ともしら鼠ともいふこそと打  
込まれて、爰に物定の博士暫く默然たり。

鮎は鵜川の篝火に責られ、鯰は濁江の瓢箪におさへらる。此目魚は黑白に裏  
表をあらはし、海鼠は跡も先もなし。

齒もたまらぬ鱧の骨は、何の爲に持ちたるや、それも海月のなきには勝れる  
か。

こゝに蛸の入道は、壺に入りてとらるゝこそ恐なれ。那智の瀧壺ならば、文  
覺が行力をも傳ふべきを、一休の口にはほめられながら、まさなの法師の身の  
果かな。

かながしらといふ名のめでたくてぞ、産屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを  
石持といふものゝ、銀持ともいはし、世に如何がかりもてなさむを、益なき名  
をもちて口をしとや思ふらん。

鱧、細魚はをさなき心地ぞする。大男の髭くひそらして食ふべきとも覺えず。

鯨は、たゞ釣る此の面白きなり。里は碇に蚊屋しまひて、木曾に使よき人は、  
まだき新蕎麥喰ひたりなどほのめかされて、羨ましき比ならん。

泥鰌は、酒の上に赤味噌ほどよく調じて、唐辛子くはへたるこそよけれ。白  
味噌がちなる大宮人は、いかに喰ふらんとさへ覺束なし。

鰻とは先名のふつゝかなり。いかで無比の美味もそなへて、あしき毒を持た  
りけむ。その味と毒の世にすぐれたれば、食ふ人を無分別ともいひ、くはぬ人  
を無分別ともいへり。

鰯といふものゝ味ひことに勝れたれども、昆山のもとに玉を礫にするとか、  
多きが故に賤しまる。たとへ骸は田島のこやしとなるども、頭は門を守りて、  
天下の鬼を防ぐ。其功鰐鯨も及ぶべからず。

されば歌人は鳥蟲に四季をわかちて、魚に四時の題詠はなし。俳人兼ねて魚  
を品題とするは、もつばら味ひて賞翫を捨てざる故なり。しかれば歌よみは、  
耳目の愛にとまりて、食は野卑なりとて取らざるに似たれど、かの喰うべき



若葉をもつばらによみて、菜の花のうつくしきを歌の沙汰に及ばぬは、喰はれぬ故によまざるにや、無下に口惜しと人の言ひたる、さがなき詞ながらをかかりけり。

——「鵜衣」——

註 (一) 妖物論 「鵜衣」前編下にある、鵜衣は、天明六年頃の刊行である。俳文が技巧的に發達した極點を示すもので、許六の「風俗文選」と共に斯界の代表作である。○鬼は 羅城門の鬼が渡透綱にとられた腕をその伯母に化けて取戻した語(前太平記等)。○狐は 狐が獵師の伯父伯藏主に化けて、意見する話(狂言「こんくわい」)。○三歳圖繪 八十一卷、(和漢三才圖) ○訓蒙圖彙 中村惕齋著二十一卷、動植物の圖説したもの(寛文六年刊)。○關守 關寺小野小町の落魄して近江關寺の邊にあつたと云ふ傳説(謡曲關寺小町)。○檜櫃 筑紫の遊女、老後、小野姑古が尋れた話(後撰集、大和物語)。○猿澤 奈良時代にある采女、君龍の衰へたるを悲しんで入水した。(万葉十六卷、大和物語)。○馬嵬 楊貴妃の殺されたところ。○九相 蘇東波の詩。その題目、相、方亂相、歌食相、青瘀相、白骨連相、骨散相、古墳相の九つ。(二百魚譜) ○人は武士 一休の狂歌、その下句は「小袖は紅梅花はみよし野(尤) ○糸かけて 儀式用の進物には尾緒を糸で張る。○仙人 琴高と云ふ仙人が鯉に乗つてゐる。○龍を鱗の司 有鱗之蟲、三百六十、而蛟龍爲之長(箋註倭名抄)。○料理 朱伴が屠龍の技を學んだが用ひやうがなかつた。(莊子)。○大聖 孔子。その子と云ふ。○多能を恥つ 大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也、云々(論語)。○次郎兵衛 越中の盛繼。五郎兵衛は上總の忠清。共に平家の

侍大將。○張氏 晉の張翰。○平家 清盛が微官の時、熊野へ參る途中、鰯が舟に飛込んだ語(平家物語)。○鮒 琵琶湖の源五郎洞庭之鮒(呂) ○空也 醍醐帝の皇子、天祿三年九月十一日寂。奥州行脚の立出日十一月十三日を忌日と定む。○鯖 鯖は中元の日の祝用とす(和漢三才圖繪)鯖をへる人もある世か蓮の飯(如在の句) ○鎌倉の海草 徒然。○木の端 枕草子。○その梢 深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり(源) ○紫の上 源氏物語に紫の上は春の曙を好み秋好中宮は秋の夕暮を愛した事見ゆ。○狭夜姫 大伴狹手彦の妾。夫の浦山で別れを惜んで石と化した傳説。○物定 右馬頭物定の博士になりてひびらき居たり(源氏、帚木卷)。○一休 一休僧を好み、常に引導見ゆ。に ○白味噌 宮廷の人の甘たるいを嘲る。又「わが國の梅の花に似たれども大宮人はいかに云ふらむ」(安倍宗任)。○食ふ人 諺に「河はぬたわけに」 ○昆山 崑崙山は有名な玉の産地。○頭は 節分の夜、終と共に食ふたわけに。 ○昆山 崑崙山は有名な玉の産地。○頭は 節分の夜、終と共に食ふたわけに。



谷  
口  
蕪  
村

高 狸

麗 物

舟 語



芭蕉以後、最も傑出した俳人たる蕪村は攝津東成郡毛馬村の人である。幼時母の生家に養はれたが、その家は丹後與謝の濱邊にあつたので後に與謝を姓とした。本姓は谷口、名は長庚、のち寅と改めた。字は春星で、蕪村三葉堂、夜半亭、碧雲洞等の號がある。二十歳を過ぎて江戸に出て俳諧を早野巴人に學んだ。それから東北漫遊の途に上り、久しく旅に暮したが江戸に戻つて又、木曾路から京に歸つたのは寶曆二年三十七の時であつた、爾後十數年は、丹後に三年閑居した外は常に西の國々を遍歴し五十歳の頃初めて京に庵を結んだ、かくして天明三年六十八歳で世を去つた。蕪村は所謂天明調の俳諧の中心人物たるのみならず、美術史上にも偉大なる足跡を印し、池大雅と併んで當代文人畫家の雙璧であつた。詩人にして畫家なるもの、その文學に畫趣あるは當然の事に屬する。彼の句は非常に印象が鮮かである。それと共に色彩が濃厚である。自然と人事との渾然たる融合は彼が獨自の境地である。吾々は近世藝術史上の巨匠として、不朽の生命ある者を彼に於て見る。

### 狸物語

結城の丈羽、別業を構へて、ひとりの老翁をして、常に守らせけり。市中ながら、樹生ひ嵩み、草茂りて、聊か世の塵をさくるたよりよければ、余も暫く其所に宿りしにけり。翁は洒掃の他、爲すわざもなければ、孤燈のもとに念珠つまぐりて、秋の夜の長きをかこち、余は奥の一間にありて、句をねり詩をうめき居けるが、やがて、こうじにたれば、蒲團引かぶりて、そろ／＼と睡らんとする程に、廣縁の方の雨戸を、どし／＼と叩き物するに、二三十ばかり連ね打つ音す。いとあやしく胸とゞめきけれど、むくと起き出で、やをら戸を開き見るに、月に遮るものなし。又ふしどに入りねふらんとするに、はじめの如く、どし／＼と叩く。又起き出で見るに、ものゝ影だになし、いと



くとおどろおどろしければ、翁に告げて、いかゞはせんなどはかりけるに、翁曰く、ござめれ狸の所爲なり。又來り打つ時、足下そごは速かに戸を開きて、逐ひつべし。翁は脊戸のかたより廻りて、くね垣のもとに隠れ居て待つべしと、笞ひきそばめつゝ窺ひゐたり。余も狸寝入りして待つほどに、又どし〜と叩く。あはやと戸を開けば、翁もやゝと聲かけて出で合ひけるに、すべてものなれば、翁うち腹立ちて、隈々残るかたなく狩りもとむるに、影だに見えず。かくすること連夜五日ばかりに及びければ、心疲れて今は住まふべくあらず覺えけるに、丈羽が家のおとななるもの來りて云ふ。そのもの今宵は、まゐるべからず。此あかつき、簀下といふところにて、里人狸の老いたるをうち得たり。思ふに此程あしく驚かし奉りたるは、疑ふべくもなし、シャツが所爲なり。今宵は寝も安くおはせよなど語る。果してその夜より音なく成りけり。にくしとこそ思へ、此ほど旅のわび寢の、さびしきを訪ひよりたる、かれが心のいとあはれに、かりそめならぬ契にやなど、うち嘆かる。されば善空坊といへる道心者

を語らひ、布施とらせつゝ、ひと夜念佛して、かれが菩提をとぶらひ侍りぬ。

秋のくれ佛に化る狸かな

狸の戸におどづるゝは、尾をもて招くと人いふめれど、左にあらず。戸に脊をうちつくる音なり。

むかし丹後の宮津の見性寺といへるに、三とせ餘り宿りゐにけり。秋の初よりあつふるひの爲に苦しむこと五十日ばかり、奥の一間いと〜廣き座敷にて、常に障子ひしと戸ざして、風の通ふひまだにあらず。其次の一間に病床をかまへ、隔ての襖をたてきりて有りけり。ある夜四更ばかりなるに、病やゝひまありければ、厠に行かんと思ひて、ふらめき起ちたり。厠は奥の間の樽縁くねをめぐりて、いぬゐの隅にあり。灯も消えていたう暗きに、隔ての襖おし開けて、先右りの足を一步さし入れければ、何やらんむく〜と、毛のおひたるものを踏み當てたり。おどろ〜しければ、やがて足を引きそばめて、窺ひ居たりけるに、ものゝ音もせず。あやし〜おどろしけれど、胸うち定めて、此のたびは左



りの足もて、こゝなと思ひてはたと蹴たり。されど露さはるものなし。いよよ心得ず、身の毛たちければ、わな／＼／＼庫裡なるかたへ立こえ法師しもべなどの、いたく寐こちたるをうち起して、かく／＼と語れば皆起き出でつ、燈火あまた照して奥の間に行きて見るに、襖障子は常の如く戸ざしありて、のがるべき隙なし。もとより怪しきもの、影だに見えず。皆云ふ。わどの病におかされてまさなくそいろごといふなめりと、怒り腹立ちつゝ皆臥したり。中々にあらぬこといひ出でけるよと、面なくて我も臥床にいりぬ。やがて眠らんとする頃、胸のうへ磐石をのせたらんやう覺えて、たゞ呻きにうめきける。其聲のもれ聞えけるにや、住侶竹溪師いりおはして、あなあさまし。こは何ぞとたすけおこしたり。やゝ人心地つきて、かくとかたりければ、さることこそあなれ、かの狸沙彌が所爲なりとて、妻戸おしひらき見るに、夜しら／＼と明けて、あからさまに見認めけるに縁より簀の子の下につゞきて、梅の花のうちちりたるやうに跡付けたり。扱ぞ先きにそいろごと云ひけりとて、罵りたる者共、さな

ん有りけりとてあざみ合へり。竹溪師はあはやと急ぎ起き出で玉ひけるにや、おびも結びあへず、衣もうち披きつゝ、ふくらかなる鞞丸の半囊の如きに、白き毛種々生ひふさりて、まめやかなるものは有りとも見えず。若きより痒がり病ありとて、たゞ鞞丸を引きのばしつゝ捻り搔きておはす。其有様いとあやしく、かの米鶴<sup>\*</sup>長老の聖經にうみたるにやと、いとおそろしく心おかれければ、竹溪師うちわらひて

秋ふるや楠八疊の金閣寺

竹溪

## 高麗舟

高麗舟のよらで過ぎゆく霞かな。

大津繪に糞おとしゆく燕かな。



畑打や木の間の寺の鐘供養。

春雨や綱\*が袂\*に小提灯。

女俱して内裏拜まん朧月。

水温む頃や女のわたし守。

御手討の夫婦なりしを衣がへ。

不動畫く宅磨\*が庭の牡丹かな。

絶頂の城たのもしき若葉かな。

五月雨や大河を前に家二軒。

春秋や狐の退かぬ小百姓。

討はたす梵論\*連れ立つて夏野かな。

楊州の津も見えそめて雲の峯。

青梅に眉あつめたる美人かな。

\*かはたろ河童の戀する宿や夏の月。

禪に團扇さしたる亭主かな。

飛入の力者あやしき角力哉。

月天心貧しき町を通りけり。

山は暮れて野は黄昏の芒かな。

柳散清水涸石處々。

日は斜關屋の鎗にとんぼかな。

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな。

霜百里、舟中にわれ月を領す。

大徳の糞ひりおはす枯野かな。

寒月や衆徒の群議すぎて後。

宿かさぬ火影や雪の家ついき。

\*易水にねぶか流るゝ寒さかな。

書記殿司故園に遊ぶ冬至かな。



宿かせと刀投げだす吹雪かな。  
細道になりゆく聲や寒念佛。

註

(一)狸物語

蕪村が旅で得たいろ／＼の話を書きとめた「新花摘」の中から狸に關するものを出して見たのである。

〇くね垣

生垣に同じ

〇あつ

ぶるひ

悪寒、さむけの事

〇朱鶴

朱松露の事か。字子鳴、松江華亭の人。性孤介絶俗。

(二)句抄

〇綱

羅生門に於ける勇士渡邊綱の事。一説に

一條戻り橋、柳風呂の遊女綱を云ふと。

〇宅磨

名は勝賀、鎌倉時代の佛畫の名家宅磨派の祖。

〇河童

想山著聞集に河童が人に化けて女に通ふ話がある。

梵論

虚無僧。徒然草の宿河原の決闘を句にせるか。

〇易水

荆軻の故事、「風蕭々易水寒、壯士一去復不還」

〇書記殿司

徹書記は東福寺の僧で

歌人、兆殿司は畫家、共に室町末期人。故園とはもと共に住みし精舎を指す。

か し 鳥

和歌三 (縣門の人々)



## か し 鳥

わが宿のそがひに立てるかしの木にかし鳥來鳴く頃は早や來ぬ  
みよし野の離宮どころとめくれればそこも知らに薄生ひたり  
ふる雪にきそひ狩する狩人の熊のむかばき眞白になりぬ

——「田安宗武」——

今もかも咲き匂ふらむ大和なる巨勢の春野のつらく椿  
\*もののふの草むす屍としふりて秋風さむし桔梗が原  
獨りのみ思ひついでて歎かな人に云ふべき昔ならねば

——「河津美樹」——

五百つ鳥ふみ驚かし御狩人朝けの風に袖ふきかへす

田安宗武 八代將軍吉宗の第二子。松平定信(樂翁)の父である。在滿、眞淵に就いて古學を修めた。歌學、聲律、故實に關する著書もあるが、歌集を「天降言」と云ふ。明和八六、四、薨。五十七。

河津美樹 加藤とも云ふ。美樹は字萬伎とも書く、通稱大助。靜の舎と號す。幕府大番の士。安永六、六、一〇歿。五十七。歌集を「靜の舎家集」と云ふ。

伊能魚彦 下總香取郡佐原の人で姓を楯取とも云ふ。通稱茂左衛門。江戸に出て濱町の眞淵の縣居に近く住み茅生の庵と號した。天明二、三、二三、歿。六十。歌集の纏つたものなく「楯取魚彦家集」「大船のかとりの魚彦雜集」「魚彦遺稿」など一部分のみしかない。

加藤千蔭 村田春海(その條を見よ)

倭文子 油谷氏、もとは幾子と云ふ。京橋弓町の人。歌集「文布」。「散りのこり」。文に「伊香保の道行ぶり」がある。寶曆二、七、十八、歿。二十歳。

筑波子 幕臣土岐頼意の妻。もとは茂子と云ふ。「筑波子家集」がある。

よの子 鶴殿孟一の妹。紀州侯の奥に仕へ瀬川と呼んだ。仕を退いて尼となり涼月院と云つた。「佐保川」「涼月遺草」がある。天明八年の秋、六十餘で逝いた。



夕されば立ちくる波にさしのぼる月も渚によるかどぞ見る  
\*つげの野の、むろの氷の、とくるまに／＼、照りと照る水無月のそらに、  
去年の落葉見つ。

——「伊能魚彦」——

幾代々の宮木に洩れて深山木の老木ながらに若葉さすらむ

宵の雨にぬる、瑞枝を洩れ出づる月の色こそなまめきにけれ

墨田河堤にたちて船まてば水上遠くなくほとゝぎす

秋さへも波にたぐひてよせくらむ夕潮のぼる川づらの宿

内日さす宮路の雪にあぢまさの車しづけき朝ぼらけかな

——「加藤千陰」——

なづな咲く花の匂ひに暮れかねて霞にのこる春の山畑

とまり舟とまの雫の音たえて夜雨の時雨ぞ雪になりゆく

見し世には唯なほざりの一言も思ひ出づればなつかしきかな

雨晴る、夕ぐれ竹の奥しめてしめやかに鳴く鶯の聲

入日さす片山林奥見えてちるや樗の花の夕影

——「村田春海」——

片山の鳶はふ道を分けくれば巖も秋になりけるかな

通ふべき身にしもあらば小夜ふけて時雨る、道に君は濡らさじ

——「倭文子」——

訪はれなば恥しがるべき宿なれど花し匂へば人を待たる、

わがせこが解き洗ひ衣も縫はなくに萩の葉そよぎ秋風ぞ吹く。

\*いはけなくいかなる様にたどりてか死出の山路を獨り越ゆらむ

——「筑波子」——

相思はでうつろふ花をはかなくも身にかふばかりなど惜むらむ

おそろふるうき世のさがの女郎花霜おくまでは残らずもがな

——「よの子」——



註

かし鳥 眞淵門下で歌人としてすぐれたもの、作を集めた。時代で云へば明和安永前後である。その中、魚彦、美樹、千陰、春海は「縣門の四天王」と稱せられてゐる。前二者が全く師風を承けてゐるのに反し、後二者は、古今と新古今の折衷で、江戸流と云はる、新格調を創めてゐる。而してこの二人は共に文化まで生存した。猶女流三人は「縣門の三才女」と謳はれた人達である。

○もののふ この歌は後年、美樹の弟子上田秋成が石に刻んで信州桔梗原に立てた。

○つけの野 これは魚彦の得意な旋頭歌である。旋頭歌は萬葉集に見える一歌體で、五七七、五七七の二句からなるものである。

○いはけなく 三歳の子を亡くした時の作

本居宣長

源氏物語に就いて  
ふみまなび



## 源氏物語に就いて

こゝらの物語書どもの中に、此物がたりはことにすぐれてめでたきものにして、大かたさきにも後にもたぐひなし。まづこれよりさまなる、<sup>\*</sup>ふる物語どもは何事も、さしも深く心をいれて書けりとしも見えず、たゞ一わたりにて、あはめづらかに興ある事をむねとし、おどろくしきさまの事多くなどして、いづれもく、物のあはれなるすぢなどは、さしもこまやかにふかくはあらず。又これより後の物どもは、<sup>\*</sup>さごろもなどは何事も、もはら此物がたりのさまをならひて、心をいれたりとは見ゆるものから、こよなくおそれり。其外もみなことなることなし。たゞ此物語ぞこよなくて、殊に深くよろづに心をいれて書ける物にして、すべての文詞のめでたきことは、さらにもいはず、よにふる人のた

宣長、字春庵（或は舜庵 鈴屋と號す。享保十五年五月七日伊勢松坂に生れた。十一歳で父を失ひ、二十二歳で兄定治を失つて家を嗣いだ。寶曆二年（二十三歳）母のすゝめで京に上り日堀景山に儒を學び四年武川幸順に就て小兒科の醫術を學んだ。この頃契沖の著書によつて古學に興味を覺えたが、七年郷に歸つて開業した。折から眞淵の冠辭考を見てますく國學の志を固めた、十三年眞淵に會ひこゝに古事記研究の緒を開いた。爾來三十餘年時々の小さな旅はしたけれど、多くは書齋の人として、その業績は徐々に蓄積せられたのである。かくて名聲國內にとゞろき、門弟は全國に互つた、寛政六年奥醫師の名義で紀州家に聘せられ國文學を講じたが享和元年に至り、秋九月二十九日、七十二歳で歿した。墓は、松坂の南二里、山室山の妙樂寺にある。世に國學の四大人として契沖、春滿、眞淵、宣長をあげるが、内實上の完成者としては宣長を推さればならぬ。古事記傳四十九卷を初めとして、詞の玉緒、玉の小櫛、歷朝詔詞解、直毘靈、古今集、遠鏡等、數十卷はその鴻業を語るものである。鈴屋集九卷は創作方面を語るものであるが、文章家としての優秀な技能は認められるが、和歌はむしろ平凡であつたと云はねばならぬ。所詮、彼は學者としての第一人者であつた。思想史上の偉大なる人物であつた。



たずまひ、春夏秋冬をりくくの空のけしき、木草のありさまなどまで、すべて書きざまめでたき中にも、男女、その人々の、けはひ心ばせを、おのおのこころに書き分けて、ほめたるさまなども、皆其人々のけはひ心ばへにしたがひて、一やうならず、よく分れて、うつゝの人にあひ見るごとく、おしはからるるなど、おぼろげの筆の、かけても及ぶべき様にあらず。さて又よろづよりもめでたき事は、まづからぶみなどは、よにすぐれたりといふも、世の人の事にふれて思ふ心の有りさまを書ける事は、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく淺きものなり。すべて人の心といふものは、からぶみに書けるごとく、一かたにつきりなる物にはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかやくやと、くだくしくめしく、みだれあひて、さだまりがたく、さまざまのくまおほかる物なるを、此物語には、さるくたくしくまぐまぐで、のこるかたなく、いともくはしく、こまかに書きあらはしたること、曇りなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくにて、大かたの人の情のあるやうを書けるさまは、やま

ともろこし、いにしへ今ゆくさきにも、たぐふべきふみはあらじとぞおぼゆる。又すべて卷々の中に珍らしくおどろくしく、めさむるやうの事は、をさくなく、はじめよりをはりまで、たゞよのつねの、なたらかなる事の、同じやうなるすぢをのみいひて、いと長き書なれども、よむにうるさくおぼゆることなく、うむことはなくて、たゞつゞきゆかしくのみをおぼゆるかし。おのれをしへねどものためにはやくより、此ものがたりを、よみときてきかすこと、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに説くにうむ心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども、いさゝかもうむ心いせず、たびごとに、はじめてよみたらむこゝちして、めづらしくおかしくのみおぼゆるにも、いみじくすぐれたるほどはしられて、かへすがへすめでたくなん。



## ふみまなび

おのれ、いときなかりし程より、書を読むことをなん、よろづよりもおもしろく思ひて讀みける。さるははかばかしく師に就きて、わざと學問すともあらず、何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなく、唯からのやまどのくさくさのふみをおるにまかせ、得るにまかせて、古き近きもいはず、何くれと讀みけるほどに、十七八歳なりし程より、歌よまほしく思ふ心出で來て、よみはじめけるを、それはた、師に従ひて學べるにもあらず、人に見すことなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集ども古き近きこれかれと見てかたの如く、今の世のよみざまなりき。かくて、はたりあまりなりし程、學問しにぞて、京になん上りける。さるは十一のとし、父におくれしに

おはせて、江戸にありし家<sup>\*</sup>のなりはひをさへに、失ひたりし程にて、母なりし人のおもむけにて、くす<sup>\*</sup>しの業をならひ、又そのために、よのつねの儒學をもせんぞてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじめ契沖といひし人の説を知り、その世にすぐれたる程をも知りて、この人のあらはしたるもの、餘材抄、勢語臆斷などをはじめ、その外もつぎつぎにもとめ出で、見けるほどに、すべて歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やう／＼にわきまへさとりつ。

さて後、國にかへりたりし頃、江戸より上れりし人の、近き頃出でたりとて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居大人の御名をも、始めて知りける。かくてそのふみ、はじめの一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠く、あやしきやうに覺えてさらに信ずる心はあらざりしかど、なほあるやうあるべしと思ひてたちかへり、今ひと度見れば、まれ／＼には、げにさもやと覺ゆるふし／＼も出で來ければ、またたちかへり見るに、いよいよ



げにと覺ゆること多くなりて見る度に信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりの心言葉の、まことに然ることをさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉のときごとは、なほいまだしき事のみぞ多かりける。おのれが歌まなびのありしやう、大かた此の如くなりき。

さて又道のまなびは、先づはじめより、神書といふすぢのもの、古き近き、これやかれやと讀みつるを、はたちばかりの程より、わきてこゝろざしありしかど、とりたてゝわざと學ぶことなかりしに、京に上りては、わざとも學ばんと、志は進みぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になすらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものゝ説くおもむきは、皆いたく違へりと、はやくさとりぬれば、師とたのむべき人もなかりしほどに、われいかでいにしへのまことのむねを考へ出でんと、思ふ志深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへす讀み味ふほどに、いよゝゝ志深くなりつゝ、この大人を慕ふ心、日にそへてせちなりにしに、一年このうし、田安の殿の仰せごを承はり

給ひて、この伊勢の國より大和山城など、此處彼處と尋ねめぐられしことありしをり、この松坂の里にも、二日三日といまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞きて、いみじくゝちをしかりしを、かへるさにも、また一夜やどりたまへるを、うかがひ待ちて、いとゞ嬉しく、急ぎやどりにまうでて、はじめに見え奉りたりき、さて、つひに名簿を奉りて、教をうけたまはることにはなりたりきかし。

—「鈴屋文集」—

註 (一)源氏物語に就いて 「玉の小櫛」の一節。この書は源語の評論で、宣長が小説に對する卓見を示したものである。眞の意味での文藝批評である。寛政八年の作で同十一

年刊行した。九卷もの。 ○ふる物語 源氏物語以前の小説。竹取、 ○さゝころも 六條齋院の宣旨の作

局の作とも云ふ。四巻。源氏模倣の宮廷中心の小説。 (二)ふみまなび 「鈴屋文集」より。 ○はたち餘り 寶曆二年二十

に上り堀景山 ○父 小津三右衛門 ○家の業 木綿問屋。江戸大傳 ○くすし 寶曆四年、京

學ぶ ○餘材抄 古今集の註釋三十卷 元祿四年成 (契沖) ○田安 宗武の ○一夜のやさり 寶曆十三年五月二



館新上屋で初めて  
眞淵に會つた。

○名簿

寶曆十二月十六日附の入門許諾狀を十八日にうけとり、翌明和元年正月、入門誓詞を呈じ、こゝに眞淵との師弟關係成る。

上田秋成

吉備津の釜  
長町の夕



## 吉備津の釜

妒婦の養ひがたきも、老いて後其功を知ると。咎あやこれ何人の語ぞや。害わざはひの甚しからぬも、商工わたらひを妨げ物を破りて、垣の隣の口をふせぎがたく、害の大いなるに及びては、家を夫ひ、國を亡ぼして、天が下に笑を傳ふ。いにしへより此毒にあたる人、幾許といふ事を知らず。死して蟒へびとなり、或は霹靂はたがみを震うて怨を報ゆる類は、其肉を醃うにするとも飽くべからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく脩めて教へなど、この患おのづから避くべきものを、只かりそめなる徒あだごとに、女の慳あだしき性を募らしめて、其身の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは氣にあり、婦を制するは其夫の雄々しきにありといふは、現にさることぞかし。

秋成は大阪の人。曾根崎新地の妓女の腹から生れたと云ふ。幼少の頃上田氏に養はれた。青春の頃は紅燈の巷に出入したらしいが、修學の方面では、まづ俳諧を几圭に學び無腸と號し、國學を加藤美樹(眞淵門下の人、大阪在番の士)に享けた。三十八歳の時火災に逢ひ、發念して醫を學び五十五歳まで業をつけたが、やめて、長柄の里に隱栖した。その内、眼を病み、母にも別れた。寛政五年六月遂に京へ出た。而して南禪寺畔の寓居で暮したが文化六年六月二十七日、七十六で歿した。創作家としては三十三歳で「諸道聞耳世間猿」「世間妾氣質」と云ふ八文字屋風の作を作り、三十五歳で兩風物語あを書いた。その外、國文學に關する雜著、俳諧書も多いが、彼の面目を見るには、隨筆「膽大小心録」、歌文集「つららふみ」、及び「癩辭談」で、小説には猶「春雨物語」がある。彼は一生を不遇に終つたが、多面多趣の士であつた。歌人として、俳人として、また國學者として相當の地位を占め得べき業績があり、茶人としては當時から認められてゐたが、所詮は「兩月物語」の作者として永久に文藝史上に記憶せらるゝであらう。



吉備の國賀夜郡庭妹にひせの郷に、井澤庄太夫といふものあり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、去んぬる嘉吉元年の亂に、かの館を去りてこゝに來り、庄太夫にいたるまで三代を経て、春耕し秋收めて、家豊に暮しけり。一子正太郎なるもの、豊業なりはひを厭ふあまりに、酒に亂れ色に耽りて、父が徒を守らず。父母これを歎きて私にはかるは、あはれ良き人の女子むすめの貌よきを娶りてあはせなば、渠が身もおのづから脩まりなんとて、あまねく國中をもとむるに、幸に媒氏ありていふ。吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれたち秀麗みづかにて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工なり。從來かの家は吉備の鳴別なびが裔にて、家系も正しければ、君が家に因み給ふは、果吉祥きはなるべし。此事の就らんは老が願ふ所なり。大人の御心いかにおぼさんやといふ。庄太夫大に怡び、よくも説かせ給ふものかな。この事我家にとりて千年の計なりといへども、香央は此國の貴族にて、我は氏なき田夫なり。門戸敵すべからねば、恐くは肯ひ給はじ。媒氏の翁笑をつくりて、大人の謙り給ふ事甚し。我必ず萬歳うたを諷ふべしと、往きて香

央に説けば、彼方にもよろこびつゝ、妻なるものにもかたらふに、妻もいさみていふ。我女子既に十七歳になりぬれば、朝夕によき人がな娶せんものをと、心もおちる待らず。はやく目をえらみて、聘禮しんれいを納れ給へと、強にすゝむれば、盟約すでになりて、井澤にかへりごさす。即て聘禮を厚くごさのへて送り納れ、よき日をとりて、婚儀をもよほしけり。

猶幸を神に祈るとて、巫子祝部かんなぎはふりを召しあつめて、御湯をたてまつる。そもそも、當社に祈誓する人は、數の祓物を供へて、御湯を奉り、吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞をはり、湯の沸き上るにおよびて、吉祥には釜の鳴音牛の吼ゆるが如し。凶きは釜に音なし。是を吉備津の御釜祓かまはらといふ。さるに香央が家の事は、神の祈けさせ給はぬにや。只秋の蟲の叢にすだくばかりの聲もなし。こゝに疑をおこして、此祥を妻に語らふ。妻更に疑はず。御釜の音なかりしは、祝部等が身の清からぬにぞあらめ。既に聘禮を納めしうへかの赤繩あかじゆに繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと聞くものを、ここに井澤は弓の本來を



もしりたる人の流にて、掟ある家と聞けば、今否むとも承はじ。殊に佳婿の麗なるをほの聞きて、我兒も日をかぞへて待ちわぶる物を、今のよからぬ言を聞くものならば、不慮なる事をや仕出でん。其時悔ゆることも返らじと、言をつくして諫むるは、まことの女の意ばへなるべし。香央も従來ねがふ困なれば、深く疑はず。妻のことばに従きて、婚儀と、のへ、兩家の親族氏族、鶴の千とせ龜の萬代をうたひ、ことぶきにけり。

香央の女子磯良、かしこに往きてより、夙に起きおそく臥して、常に舅姑の傍を去らず、夫が性をはかりて、心をつくして仕へければ、井澤夫婦は孝節を感でたしとて、歡に耐へねば、正太郎も其志に愛でて、むつまじくかたらひけり。されどおのがまゝの奸けたる性はいかにせん。いつの比より鞆の津の袖といふ妓女に、ふかくなじみて、遂に贖ひ出し、ちかき里に別荘をしつらひ、かしこに日をかさねて、家にかへらず。磯良これを怨みて、或は舅姑の忿に托せて諫め、或日は徒なる心をうらみかこてども、大虚にのみ聞きなして、後は月

をわたりてかへり來らず。父は磯良が切なる行止を見るに忍びず、正太郎を責めて押籠めける。磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に實やかに、かつ神の方へも私に物を餉りて、信のかざりをぞつくしける。

一日父が宿にあらぬ間に、正太郎磯良をかたらひていふ。御許の信ある操を見て、今はおのれが身の罪をくゆるばかりなり。かの女をも古郷に送りて後、父の面を和め奉らん。渠は播磨の印南野の者なるが、親もなき身の淺しくてあるを、いごかなしく思ひて、憐をもかけるなり。我に捨てられなば、はた船泊の妓女となるべし。おなじ淺しき奴なりとも、京は人の情もありと聞けば、渠をば京に送りやりて、榮ある人に仕へさせたく思ふなり。我かくてあれば、萬に貧しかりぬべし。路の代、身にまどふ物も誰がはかりごととしてあたへん。御許此事をよくして、渠を恵み給へど、ねんごろにあつらへけるを、磯良いとも喜しく、此事安くおぼし給へとて、私におのが衣服調度を金に買へ猶香央の母が許へも、偽りて金を乞ひ、正太郎に與へける。此金を得て、密に家を脱れ出で、



袖なるものを俱して、京の方へ逃げのぼりける。かくまでにたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥しにけり。井澤香央の人々、彼を惡み此を哀みて、専ら醫の驗をもとむれども、粥さへ日々にすたりて、よろづにたのみなくぞ見えにける。

こゝに播磨の國印南郡荒井の里に彦六といふ男あり。渠は袖どちかき從弟の因あれば、先づこれを訪うて、しばらく足を休めける。彦六、正太郎にむかひて、京なりとて人ごとに頼しくもあらず。こゝに駐られよ。一飯をわけて、ともに過活のはかりごとあらんと、たのみある詞に、心おちゐて、こゝに住むべきに定めけり。彦六我が住む隣なる破屋をかりて住ましめ、友得たりとて怡びけり。しかるに袖、風のこつちといひしが、何となく惱み出でて、鬼化のやうに狂はしげなれば、こゝに來りて幾日もあらず。此禍に係る悲しきに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、只音をのみ泣きて、胸窮り堪がたげに、さむれば常にかはることもなし。窮鬼といふものによ。古郷に捨てし人のもし

やと獨り胸苦し。彦六これを諫めて。いかでさる事のあらん。疲といふもの、惱しきは、あまた見來りぬ。熱き心少しさめたらんには、夢わすれたるやうなるべしと、やすげにいふぞたのみなる。看るゝ露ばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭悲しみ、ともに物狂はしきを、さまざまにいひ和めて、かくてはとて遂に曠野の烟となしはてぬ。骨をひろひ、壘を築きて、塔婆を營み、僧を迎へ、菩提のこゝねんごろに弔ひける。

正太郎今は俯して黄泉をしたへども、招魂の法をもとむる方なく、仰ぎて古郷をおもへば、かへりて地下よりも遠きこゝちせられ、前に渡なく、うしろに途をうしなひ、晝はしみらに打臥して、夕々毎には壘のもとに詣でて見れば、小草はやくも繁りて、蟲のこゑすゝろに悲し。此の秋のわびしきは、我身ひとつぞと思ひつゝくるに、天雲のよそにも同じなげきありて、ならびたる新壘あり。こゝに詣づる女の、世にも悲しげなる形して、花をたむけ、水を灌ぎたる



を見て、あな哀、わかき御許の、かく氣竦きあら野にさまよひ給ふよといふに、女かへり見て、我身夕々ごとに詣で待るには、殿はかならず前に詣で給ふ。さりがたき御方に別れ給ふにてやまさん。御心のうちばかり奉らせて悲しと、潜然となく。正太郎いふ。さる事に侍り。十日ばかりさきに、かなしき婦を亡ひたるが、世に残りて憑なく侍れば、こゝに詣づることをこそ、心放にもものし侍るなれ。御許にもさこそましますなるべし。女いふ。かく詣でつかふまつるは、憑みつる君の御迹にて、いつくの日ことに葬り奉る。家に残ります女君のあまりに歎かせ給ひて、此頃はむづかしき病にこそませ給ふなれば、かくかはりまゐらせて、香花をはこび侍るなりといふ。正太郎云ふ。刀<sup>\*</sup>自の君の病み給ふもいとことわりなるものを、そも古人は何人にて、家は何地に住ませ給ふや。女いふ。憑みつる君は此國には由縁ある御方なりしが、人の讒にあひて領所<sup>しよところ</sup>をも失ひ、今は此野の隈に侘びしくて住ませ給ふは、こゝ近きや。訪ひまひらせて、同じ悲をもかたり和まん。俱し給へといふ。家は殿の來らせ給ふ道の、す

こし引入りたる方なり。便なりませば時々訪せ給へ。待侘び給はんものをと、前に立ちてあゆむ。

二丁あまり来て、細き徑あり。こゝより一丁ばかりをあゆみて、小暗き林の裏にちひさき草屋あり。竹の裏のわびしきに、七日あまりの月のあかくさし入りて、ほどなき庭の荒れたるさへ見ゆ。ほそき燈火の光、窓の紙を漏りてうらさびし。こゝに待せ給へとて、内に入りぬ。苦むしたる古井のもとに、立ち見入るに、唐紙すこし開けたる間より、火影吹きあふちて、黒棚のきらめきたるもゆかしく覺ゆ。女出來りて御訪のよし申しつるに、入らせ給へ。物隔りてかたりまゐらせんと、端の方へ膝<sup>かざ</sup>行り出給ふ。彼所に入せ給へとて、前栽をめぐりて、奥の方へともなひ行く。二間の客殿を人の入るばかりあけて、低き屏風を立て、古き衾の端出でて、主はこゝにありと見えたり。正太郎かなたに向ひて、はかなくて病にさへこそませ給ふよし。おのれもいとほしき妻を亡びて侍れば、おなじ悲みをも問ひかはし參らせんとて、推して詣侍りぬといふ。あるじの女



屏風すこし引きあけて、めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報の程しらせまゐらせんと云ふに、驚きて見れば、古郷に残し、磯良なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼すさまじく、我を指したる手の青く細りたる恐しさに、あなやと叫んで、たふれ死す。

時うつりて生出づ。眼をほそくひらき見るに、家とみしはもとありし荒野の三味堂にて、黒き佛のみぞ立せまします。里遠き犬の聲を力に、家に走りかへりて、彦六にしかくのよしを語りければ、なでふ狐に欺かれしなるべし。心の臆れたるときは、かならず迷し神の魔ふもので。足下のごとく、虚弱き人のかく患に沈みしは、神佛に祈りて、心を收めつべし。刀田の里にたふとき陰陽師のいます。身褻して厭符をも戴き給へと、いざなひて、陰陽師のもとにゆき、はじめより詳にかたりて、此占をもとむ。陰陽師占へ考へていふ。災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ、怨猶盡す。足下の命も旦夕にせまる。此鬼世を去りぬるは七日前なれば、今日より四十二日が間、戸を閉て、おも

き物齋すべし。我、禁を守らば、九死を出でて全からんか。一時を過るともまぬかるべからずと、かたくをしへて、筆をとり、正太郎が脊より手足におよぶまで、篆籀のごとき文字を書き、猶朱符あまた紙にしるして與へ、此咒を戸毎に貼して、神佛を念すべし。あやまちして身を亡ぶることなかれと教ふるに、恐れみ且よろこびて家にかへり、朱符を門に貼し、窓に貼して、おもき物齋にこもりけり。

其夜三更の比、おそろしきこゑして、あなにくや。此所にたふとき符文を設けつるとつぶやきて、復び聲なし。恐らしさのあまりに、長き夜をかこつ。程なく夜明けぬるに、生出でて、急ぎ彦六が方の壁を敲きて、夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おのれも其夜は寝ねずして、三更の比を待ちくれける。松ふく風物を偲すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を隔て、聲をかけあひ、既に四更にいたる。下屋の窓の紙に、ささ赤き光さして、あなにくや。こゝにも貼しつるよといふ聲、深き夜にはいど



凄しく、髪も生毛もことごとく聳立ちて、しばらくは死入りたり。明くれば夜のさまをかたり、暮れば明くるを慕ひて、此月日頃千歳を過ぐるよりも久し。かの鬼も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫びて、忿れる聲夜ましに凄じ。かくして四十二日といふ其夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に慎みて、やゝ五更の天もしらくと明けわたりぬ。長きに夢のさめたる如く、やがて彦六をよぶに壁によりていかにと答ふ。重き物いみも既に満てぬ。絶えて兄長の面を見ず、なつかしさに、かつ此月頃の憂怕しさを心のかぎりいひ和さん。眠さまし給へ。我も外の方に出でんといふ。彦六用意なき男なれば、今は何かあらん。いざこなたへわたり給へと、戸を明くる事半ならず、となりの軒にあなやと叫ぶ聲耳をつらぬきて、思はず尻居に坐す。こは正太郎が身のうへにこそと、斧引提げて大路に出づれば、明けたるといひし夜はいまだ暗く、月は中天ながら、影朧々として風冷やかに、さて正太郎が戸は明けはなして、其人は見えず。内にや逃入りつらんと走入りて見れども、いづくに竄くるべき

住居にもあらねば、大路にや倒れけんども、もどむれども、其わたりには物もなし。いかになりつるやと、あるひは異み、或は恐るゝともし火を挑げて、こかしこを見廻ぐるに、明けたる戸腋の壁に、腥々しき血灌ぎ流れて、地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にもものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髪の鬢ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし。淺しくもおそろしさは、筆につくすべうもあらずなん。夜も明けてちかき野山を探しもどむれども、つひに其跡さへなくてやみぬ。此事井澤が家へもいひおくりぬれば、涙ながらに香央にも告げしらせぬ。されば陰陽師が占の著しき、御釜の凶祥もはたたがはざりけるぞ、いとも尊かりけるとかたり傳へり。



## 長町の夕

むかし、をそこ友どちかい連ねて、住よしのこほり住吉のさと、住吉のやしろにまうでけり。霜月のはじめころにて、夕さがりがたの空霜をれて、うみなく風の潮しみていと寒し。生駒山を見れば、冬がれのところく赤はげて、西に入る日のかげにあらはにてあいなく、見るくさむげなり。今宮村を北に横をれければ、長町の南がしらなり。むづかしげなる家ども、ひし／＼とたち並びたるなかに、はたごやのところ得顔ながら、時ならねば、ゐなか人のやどりもまれ／＼にて、火<sup>\*</sup>おこさぬ夏の炭櫃のと、うちながめて過ぐるに、青物菓物あきなふ家は、葭簀<sup>たはが</sup>たて圍ひて、束薪<sup>たはが</sup>、はかり炭、それこれと賑はし。鹽魚なにかや、しびら目黒の切賣、干鰯のいさ／＼か皿に盛りたる、また何とかいふ魚

のあぶりもの、鮪の大魚をいまはしげに、切りさいなみたるに、にしんの舌たるげに煮こゝらせし、唐きびもち、あかむしの切目高なるにも、おほ路のつちかせやかづくらむ。香の物、くきづけのにはひ花やぎたるが中に、芋むす湯煙ぞあた／＼げなる。日は西にしづみはて、風いとあらぶきだち、厚肥えて著たるさへ、ゆふしめり身にしみて覺ゆ。此ほとりに宿とるとて、あさましげなる者等、たち續きてかへり来るを見れば、老いさらばへる目くらの、竹杖のかた手には、十一二なる童にひかせて、ゆく／＼うち倒るべくあゆみ来る。このあたりにては米をよばねど、聲をしあげば聞知りたらむものぞ。垢じみたるものに、面おし包みたるうばらの、手に蕪菜二かぶばかりく／＼りさげて、物得たり顔に行くもあり。ゐざり法師の頭髮おどろにあひ延びて、つゝれの肩のひまより、氷れる肌のあらはれたるが、なにごとやらむ、ひとり言しつゝゐざり行くは、今日の寒さをかこつなるべし。はやく宿れるは、一錢が鹽、二錢がもち、これかれもとめありく。此あきなふ家も、こゝに年月すみふりたるは、さるものら



もいぶせう卑しめず、それ召すか、これぞ良かめるなど、こゝろよげなり。此きたる中に、紺ぞめの尻たかくからげ、はりの木染の脚絆しめはきつゝ眞鍮鐔の長劍さしこはらしたるが、やどりいそぐに、さうし紙のおほ鳥毛、さびしげにふり擔げたるに連れだちて、辻だちの歌舞妓藝者の、紅粉おしろい斑らにけはひたる、若者とむつまじげに、うち物がたりしつゝ行くは、あるが中にもいさぎよげなれど、さすがにおどふるふ鼻のさき、太脛など、鮪いろに凍えて寒げなり。またあやしの男の、目ばかり見えて、手には鳥籠のおしつぶれたるに、朽ちたる簀のこ板持添へて、今宵の焚火のれう得たりとや、うれしげに走りゆく。辻君五六人髪はぬれぬれとあけて、白きもの衿にうつらふまで、きはくしく塗りたて、色あひ確ならぬもの、ひきかさね著て、低きあしだの音こぼこぼと響かせ、からくくと物たからかに言ひつゝ、北さまにあゆみゆく。さらさらになさけしくこそあらね、彼もまたかなしう言ひかはしたる男もあるべし。また親男の爲に、我身はあるものともせず、よひく出でたつもありとや。

あはれの操や、わりなのまこととやと、うち眺めらるゝ。やうく道頓堀に來れば、たちまち異國にいたりしかと覺ゆ。夜芝居のまうけ明日の夜よりと、櫓幕翻とひるがへれる、此ふく風は、さまざまのにはあらぬにやと、思ふも移りやすの人ごころや。

——くせものがたり——

註

(一)吉備津釜 「兩月物語」から採る。兩月は明和五年の作で、怪異小説として國文學中、最も傑出たものである。全卷九篇の短篇小説で、その中、「白峯」、「菊花の約」、「淺茅が宿」、「夢應の鯉魚」などは諸種の編纂物に採られてゐる。こゝには餘り採録せられた事のない「吉備津釜」を取つた。凄味の點では兩月の中でもすばぬけた敘述を有つてゐる。兩月は全體として支那神史の影響が著しく、翻案らしいものが多いが、この篇も「聊齋志異」から取材した。○嘉吉の亂ものであらう。この他、「佛法僧」、「青頭巾」、「蛇性の淫」なども面白い作品である。

○鴨別 四道將軍、吉備武彦の末。○御釜祓 「耳袋」神考に「後花園の御時、赤松滿祐が足利義教を弑した亂を云ふ。」と見える話。○赤繩 夫婦の約。韋固旅次守城、遇老人、向月檢書、因問囊中赤繩、云繫夫婦之足、雖仇家異域、此繫繩不可易(幽怪錄)。○窮鬼 生靈、生存せる人が恨にや。○我身一つ 月見れば千々に物、こそかなしけれ、わが身一つの秋には、あらねど古今、秋上、大江千里の歌から脱化した文。○刀自 老母の義か一家を司るもの。○三昧堂 三昧は專念の義、轉じて墓場、又は火葬場をも云ふ。

(二)長町の夕 癩癩談(くせものがたり)の一節。此書は作者が當



代に對して辛辣な諷刺と皮肉と漫罵とを恣にせし文章を集む。こゝにとつた「長町の夕」はむしろ寫生的筆致にすぐれたものである。長町の貧民窟の夕暮、その雜然猥然とした光景は目前に躍如として居る。○火おこさぬ 「火おこさぬ夏のすさびつの心地して人も ○うばら せきぞろの妻、  
候）は物乞ひ ○辻君 夜鷹とも云ふ私 ○道頓堀 今もかはらぬ「さかり場」で、當時  
の一種 娼の群である。も劇場、見物が立並んでゐた。

加藤千蔭  
 村田春海

秋 雨  
 初雁を聞く辭  
 花を惜しむ記  
 上田秋成のもとに



## 秋

## 雨

千 蔭

葉月はつかあまり、秋のけはひのなつかしくして、例のすみだ河のほとり、石濱のいほりに行ってやどりぬ。有明の月のにほひも、霧立ちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もごより萱ふけるいほりなれば、音だになくて、軒のしづくの三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色付きたるが、ほろ／＼と散るもあはれなり。水のおもてはうごくともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるけれ。みをの一すぢは、さしひく沙にもまじらで、とはに花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ち来るならむ。うち向ふ岸のはり原のみ、濃き墨

加藤千蔭 枝直の子。通稱又左衛門。芳宜園、朮園などの號がある。父の職を承けて大岡越前守に仕へ、江戸八町堀の輿力であつた。早くより加茂眞淵に學び、國學界の巨擘となつた。但し、彼の本領は學究よりも創作にあつた。所謂和文和歌の名手として、春海と並んで當代の雙壁であらう。天明八年職を辭し、文化五年九月二日、七十四で歿した。千蔭また松花堂の流れを汲む書道の大家でもあつた。「萬葉集略解」「うけらが花」等の著書がある。

村田春海 春道の子。通稱平四郎、字は士觀。兄春郷が夭折したので家をついだ。小舟町の千鯛問屋で、三年間縁の下に賊が住んでゐた事を知らなかつた程の大家であつた。春海は豪宕不羈で所謂十八大通の一人として耽溺の限りをつくし、遂に破産して了つた。千蔭の世話で八丁堀地藏橋角に移住し、歌學の師匠となつた。後には松平定信の知遇を得て俸祿を支給された。文化七年、新居を營み、父よりうけた東琴の名琴を飾り、琴後の翁と號した。同八年二月十三日、六十六を以て逝いた。春海は國學のみならず漢學の造詣深く、宣長の古道には反抗の態度をとつてゐる。「錦織齋隨筆」「琴後集」にその本領を見る事が出來よう。



がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるはさすがにほのかに見えて、其ひまひまより、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう／＼にうす墨もてかきけちたらむ如く、いとしもはるけきは、たゞなびかぬけぶりそのみぞ見ゆる、こゝかしこより、鳥飛び行きつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげにおき出でて、河の瀬の真菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より筏師の蓑笠きて、棹を筏の上によこたへ、おのれたむだきて、おもふ事なげにてをり、いかだは水のまに／＼流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたむけてわたり行く人の、やがて堤をあるくさまも繪によく似たり。すべてひと日のうちに筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ来て、岸の木立も長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、限りなき青海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてやゝ夕ぐれ近く成りゆけば、むら鳥のおのがじしねぐらもとむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはむかたなし。暮れはてゝも猶行く水の色のみ遠白くのこりて、川添小田

にいはへるみくまりの神のみ火の、海人のいさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川たが墨がきのすさびなるらむ

### 初雁を聞く辭

千 蔭

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、獨高き屋にのぼりて、七つ<sup>\*</sup>のをを琴をかきならしつゝ、秋の風の言葉をうそぶき出せる折しも、遠つ人初雁がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ見さくれば、姿は雲路になむ消え失せぬる。いでや白雪の舊年よりしも、はねならはしつゝ、かげろふの春立ちそむるあした、日影うらく／＼とうち霞めるに、軒近き篋にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより、笠<sup>\*</sup>にぬふてふ花のかをり満



てる枝に来るつゝ、ほりかにさへづるは、めでたきものから。雲にたぐへし  
 櫻も散り過ぎて、青葉しげき木の間に立ちぐく聲のむくつけきには、待たる<sup>\*</sup>  
 物はといひしに行きたがへてぞおぼゆるかし。池の藤なみ夏かけてにほへる  
 頃、ほとゝぎすの、それかあらぬかたどらるゝ一聲より、花橋のゆくりなく  
 香ににほへる曙、あり明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過ぎ行く  
 は更なり、小雨そぼふるゆふべ、物思ひにいを寝ずして更け過ぐる夜半に、を  
 ち返り鳴くを、誰やし人かあはれとおもはざらむ。然はあれど、山かたつける  
 わたりには、こちたきまで飛びかひつゝ、梢にしもおりゐて高やかに鳴きこよ  
 めるなどは、今一聲のといふべくもあらずうれたきや。そもく雁は、常世の  
 國をや出でけむ、三越路よりや來ぬらむ、ある時は眞木立てる荒山のあしたの  
 霧にむせび、ある時はみるめ刈るやしほちの夕べの浪をつばさにかけて、草の  
 枕だに結びあへず、天路はるかにおもひあがりて、夕暮の雲のはたてに、聲は  
 舟漕ぐ唐艦にかよひ、姿は薄墨にかける文字に似て、一つら過ぎ行きつゝ、遠

方の田づらに落ちくるさまさへ、おほどかにして、其時しも、萩の葉におこな  
 ふ風、萩が枝に亂るゝ露ぐまなき夜半の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび  
 八千たび打ちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなるをりに逢ひぬるが、限りな  
 くめでたくなむ。また別けていぬる春へには花を見捨つるなどがむめれど、  
 しづけかるみ山の花を、つばさにしめむとて、都の空をいそぐならむと思へば、  
 そもはたにくからすこそ。雁よくなれこそはわがおふどちなりけれ。

われもいざ秋をあはれぶ友どちのつらにはもれじ天つかりがね

——「うけらが花」——

## 花ををしむ記

春 海

つれなくと降りくらしたる長雨も、やうくはれ間おぼゆるに、かゝるゆふ



べをたゞにやは過すべき、春のゆくへをもしのばむ、花の名残をも見ばや、い  
 ざとて、葎生の門おどろかすなるは、我相思ふ人々なりけり。さるはいづこの  
 心ゆく方ならむといふにかしこの御館、この御園生、此ごろのけはひ如何に  
 見所あらむといふもあり、又なにの山里、その河づら、猶散り残る陰をや尋  
 ねましなどもいふを、いでかのやむごとなききはの塵もすゑじとおきてたらむ  
 は、春風の心もたどらで、あながちに朝夕かき拂ひなどすめるが、所につけて  
 はめやすきわざとも見ゆべけれど、かへりては情おくるゝかたやいかで無から  
 む、又かの世離れたるあたりは、暮れゆく春のあはれもさこそ多かめれど、霞  
 へだつる道のそらも、いとほるかなるを、暮れかけてはなどか思ひたゝむ、さ  
 らばわれも人もあひむつばへる、羽生田のぬしの住居こそゆかしけれ、いざ給  
 へとて、うちつらねて行くに、所せきちまたの塵は、たゞ中垣の一重をへだて  
 なれど、やゝおくまりてのどかなる方をしめつれば、木立ものふりて、霞のた  
 たすまひたゞならず、ましてあるじは古のみやびしたふ人にて、なべて世の鳥\*

好てふ人の心ならひはまなばで、たゞおのづからなる山里の有様をうつしたれ  
 ば、はひりの方をばさながら畑につくりなして、なづなの花など露にうち亂れ  
 たる、いとつきゝし。垣ねをめぐりては、田所廣くうちかへして、暖きいれ  
 たる水いと清らなるに、蛙の時知りがほに聲たてたるもをかしく、くろづたひ  
 の道かたぐゝにわかれたるには、花の木どもわざとならず植ゑわたせり。さる  
 は夕日にもてはやされたる色香の、雨のなごりおぼえて、心ありげに散残れる、  
 今日\*こずばとぞ見えたる。あるじは待ちよろこべるけはひしるくて、年\*にまれ  
 なるなど口ずさみつゝ、風を待つまの木の下のにおりゐて打語へば、おのづから  
 うき世に遠きこゝちせらるゝを、誰かは市の傍とは思はむ。かくて家路をさへ  
 忘れぬべし。日入りはつれば時にかへる鳥の音もわかれをしみ顔にきこえ、入  
 相のこゑかすかにつたふるも、春を閉ぢむるこゝちして、夕やけの空も猶ふり  
 すがたしや。

かくながら花の木陰に月待ちていざもろともに散るまでは見む。



上田秋成がもごへ

春海

春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。いまはいはほの中なる住ひをふりすて給ひて、巷の花柳にたちまじらひ給ふらむは、いかに心ゆく御すみかならまし。

巢ごもれる谷の鶯いかなればみやの春に心ひかれし

となむ聞えまほしき。されどなき世の塵の、のがれがたかなるも、猶市のうちに隠れけむ、古人のためしにならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらむは、山住のつれづれならむよりはと、おしはかり参らすものから、いたづらに千里のよそにありて、萬まのあたり聞え承らぬこそ、あかぬ業なれ。さはいへ雁の翅の行きかひだに絶えずば、中々に遠くて近きた

ぐひとや思ひなぐさみ侍らむ。柳の糸のくりかへしつゝ、今年もごだえなく、聞えまらばやと思ふを、ゆみ鶯の鳴く音ををしみ給ひと。

註 ○こゝには眞淵門下の二大文章家を併せ掲げた (一)秋雨 「隅田川のほとりなる石濱の庵

云ふ原題である。石濱は隅田川の西岸、橋場の邊。○みくまり 水分の神。水神 (二)初雁をきく辭 前文と共に千陸の

花にある。享和二年、門人の編。○七つの緒 七絃琴、即ち「きんのこと」を云、(三)花を惜しむ記 前文と共に千陸の

のぬふてふ笠は梅の花笠。○あら玉 「あら玉の年たちかへる朝よりまたる、」 ○花をみすて

古今集、大歌所歌。○春霞立つをみすて、ゆく雁は花なき里 (三)花を惜しむ記 「琴後集」卷十よりとる。此集は春海

にすみやならへる。古今集、春、伊勢。庭園に數寄をこらし、○今日來すば 「今日來すば、あすは

が。○羽生田 貴良。○島好 作りたてる事。○今日來すば 「今日來すば、あすは

えすはありとも花と見まや」古今集。○年にまれなる 「あだなりと名にこそ立てれ櫻花年

「同書卷十 三」に收む。○市のうち 王康瑠の反招隠に「小隠は陵藪にか

の中、極樂の道」とある。これに「隔て住む親

しき友」を加ふべきであると云ふのである。

○遠くて近き 枕草子に、「遠く

て近きもの男女



俳  
諧  
四  
(天明調)

一 麥  
夜  
四  
・ 喰 秋



\* 曲水に病後の僧の苦吟かな  
 \* 白馬寺に如來うつして今朝の秋  
 牡丹折りし父の怒ぞなつかしき  
 家ぬしを大工のそしる夜寒かな  
 山寺に誰もまゐらぬ涅槃像  
 わが庵は榎ばかりの落葉かな  
 子規几帳はなるゝ人の影  
 枯蘆や低う鳥立つ水の上  
 馬かりてかはるゝに霞みけり  
 五月雨やある夜ひそかに松の月  
 美しき燈のとぼりけり關の雪  
 勅額の尊くかすむ櫻かな  
 欠伸して月ほめてゐる隣かな

—「召波」—

—「大魯」—

—「櫻良」—

—「夢水」—

—「夢太」—

鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪  
 \* 貫之が船の燈による千鳥かな  
 人こひし灯さほし頃を櫻ちる  
 めくら子の端居淋しき木槿かな  
 菫つめば小さき春の心かな  
 秋の山どころゝに煙たつ  
 曉や鯨の吼みる霜の海  
 春風や肩にのる子の振り鼓  
 小坊主の門にたちけり秋の暮  
 枯蘆の日にく折れて流れけり  
 夕涼地藏こかして逃げにけり  
 夏瘦や西日さしたる竹格子  
 昔男なまこの如くおはしけむ

—「几董」—

—「白雄」—

—「曉臺」—

—「關更」—



麥 秋

麥秋や馬に出てゆくばか息子  
 矢橋乗る嫁よ娘よ春の風  
 御僧のその手かぎたや御身拭  
 春の夜や女をおどすつくりごと  
 白雨や膳最中の大書院  
 吹き倒す起す吹かるゝ案山子かな  
 寝よといふねざめの夫や小夜砧  
 盗人に鐘つく寺や冬木立  
 雛の宴五十の内侍酔はれけり

—「太祇」—

太祇。炭氏。江戸の人、京に移り島原に住む。慶紀逸の門に出づ。蕪村の古典的情景あるに反して世俗的情趣を特色とする。不夜庵とも號す。明和八、八、九、九、九、六十三、召波。黒柳氏。京の人。蕪村門下の逸才である。春泥舎と號す。明和八、十二、九、句集「春泥集」は子維駒が編じた。

大魯。吉分氏。阿波藩の士。後仕を辭して京に移り、更に大阪、兵庫に住む、蘆陰舎と號す、安永七、十一、十三、九。蕪村嘗て「わが門の錐囊」と稱した。

樗良。三浦氏。鳥羽の人、名は冬卿、無爲庵と號す安永九、十一、十六、九、五十二。

麥水。堀田氏。金澤の人、將基の上手で藩主の師範役に召された。俳諧は、美濃風から轉じて伊勢の春林に依つた、樗庵、暮柳舎と號す、天明二、十、十三、九、六十三。

蓼太。大島氏。江戸の人、藤屋平左衛門の子、名は平八。吏登の門人、天明七、九、七、八十。

几董。高井氏。京の人。夜半亭三世。蕪村門下の俊足、父、几圭は蕪村と共に早野巴人に學んだ人。非革集は几董の句集である。寛政元、十、二十二、九、四十九。

白雄。加舎氏。信州上田の七、昨鳥と號す寛政三、九、十三、九、五十三。

曉臺。久村氏。尾州の士。通稱平兵衛。寛政四、一、二十、九、六十一。

関更。高桑氏。金澤の人。通稱長次郎。寛政十一、五、三、九、七十三。

大江丸。安井氏。大阪の人。飛脚問屋島屋の主人で蓼太の門人。句に市井の氣分が多い。「俳諧悔」は多句集である。文化二、三、十八、九、年八十八。

士朗。井上氏。尾張の醫、曉臺の門、枇杷園と號す、文化九、五、十六、九、七十一。



曲水に病後の僧の苦吟かな  
 白馬寺に如來うつして今朝の秋  
 牡丹折りし父の怒ぞなつかしき  
 家ぬしを大工のそしる夜寒かな  
 山寺に誰もまゐらぬ涅槃像  
 わが庵は榎ばかりの落葉かな  
 子規几帳はなるゝ人の影  
 枯蘆や低う鳥立つ水の上  
 馬かりてかはるゝに霞みけり  
 五月雨やある夜ひそかに松の月  
 美しき燈のとぼりけり關の雪  
 勅額の尊くかすむ櫻かな  
 欠伸して月ほめてゐる隣かな

—「召波」—

—「大魯」—

—「櫻良」—

—「夢水」—

—「夢太」—

鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪  
 貫之が船の燈による千鳥かな  
 人こひし灯とほし頃を櫻ちる  
 めくら子の端居淋しき木槿かな  
 菫つめば小さき春の心かな  
 秋の山どころゝに煙たつ  
 曉や鯨の吼みる霜の海  
 春風や肩にのる子の振り鼓  
 小坊主の門にたちけり秋の暮  
 枯蘆の日にく折れて流れけり  
 夕涼地藏こかして逃げにけり  
 夏瘦や西日さしたる竹格子  
 昔男なまこの如くおはしけむ

—「几董」—

—「白雄」—

—「曉臺」—

—「關更」—



秋きぬと目にさや豆の太りかな  
陽炎を寂しきものと知らざりき  
太秦は竹ばかりなり夏の月  
とう／＼と瀧のこちこむ茂みかな

—「大江丸」—

—「土朗」—

一夜四唸

白菊に置き得たり露おき得たり  
残りそめぬるけさの月影  
借馬に秋を涼しくまたがりて  
濃酒ありと婦の申しけり  
小暗きと明きと燭の二所

—「嵐山」—

—「几董」—

—「櫻良」—

—「蕪村」—

—「董」—

手ごねの香爐うち守りつゝ  
かくて世に四位となるべき身分なりしを  
野上<sup>\*</sup>の君が色にしづみぬ  
中垣の障子に蠅の二つ三つ  
近くも神のどやろ鳴りくる  
よき僧を乗せて去りぬる筑紫船  
戒の亂聞くも悲しき  
雪に似て寒うはあれど窓の月  
捨扶持もらふするゑの秋かな  
思出てうかれ出でたる牛祭<sup>\*</sup>  
あとさりげなき度柏子の音  
散りつくす花一時の眺にて  
雨晴れてやゝ暮おそきなり

—「山」—

—「村」—

—「良」—

—「山」—

—「董」—

—「村」—

—「良」—

—「山」—

—「村」—

—「董」—

—「山」—

—「良」—

—「董」—



註

(一) 麥秋

天明頃の俳人の句をとり集めてかりに名づく

○御身拭

京嵯峨の清涼寺で釋迦像を開帳し、坊主が白布で像を拭ふ式を行ふ。三月十九日である。

○曲水

曲水流暢として支那遊宴の、一法を、日本化して平安朝時代殿上人の間に行はれた遊び。盃を曲り流れる水面に浮べ、その酒を飲み詩を作つて興するのである。三月三日。

○白馬寺

後漢明帝が長安門外に建てた寺。

○涅槃像

釋迦入寂の掛圖。二月十五日、寺々にて式がある。

○貫之が

土佐日記に見える海の

旅路に着想した句

○秋きぬ

秋きぬと目にはさやかに見えれども風の音にぞ驚かれぬる(古今集、藤原敏行)

(二) 一夜四唸

蕪村の編輯にかかると。今、歌仙

のうち、初折の分十八句だけを掲載した。

○濃酒

東坡の後赤壁賦「婦日吾有斗酒、藏俟子不時需」

○野上の君

遊君である。野上は地名。

○牛祭

太秦村の廣濟寺で摩多羅神を祭る。僧は異装して牛に跨り、赤鬼青鬼を従へ、社堂を廻つて祭文をよむ。九月十二日の夜である。

鶴屋南北

一 軒 屋  
蛇 山 庵 室



## 一 軒 屋

本舞臺三間の間、正面淺黄幕、こゝに百姓の仕出し立並びぬる、雙盤の音にて幕あく。

△「あゝこの空合は雪と見えるわい。降らぬ中に一稼やりかけうか」○「よからうく、サア〜ぬらくらと蛇遣はずとやりかけませう」□「あゝ、これ〜、其蛇で思出した。あの蛇山の庵室の咄を聞かしやつたか」△「聞いた段か、ナア、恐ろしい咄ぢやが、あの庵には死靈の祟とやらがあつて、家の者に鼠がついて、それは〜晝夜苦しめるげな、何でも一通りの事ぢやないて」○「イヤモウ、此方が身に關係がなけりやよいぢやないか、もう此咄はやめるがよい」□「どうか斯うちり毛もどが、ぞろ〜鼠にひかれる様な心持ちや」△「さあ、去にませうか」皆々「さあ〜ござれ〜」と捨白云うてわやく〜入る。どろ〜にて舞臺

鶴屋南北は紺屋の子で幼名源藏と云ひ父の職をついだ。安永四年(二十)金井三笑の門に入り脚本作者となつた。初め勝俊藏と云ひ、戯名を姥慰助と云つた、これは高州町に住んだのに因んだのである。文化元年、五十歳で初めて立作者となつた。文化八年十一月、俊藏を改めて鶴屋南北と名乗つたが第四世に當つてゐた。彼れは文字に乏しかつたが性來の才氣は先づ舊作の補綴を巧みならしめた。「隅田川花御所染」で鏡山と女清玄とを取入れ、浮世柄比翼の稻妻で、不破名古屋と幡隨院長兵衛とを綯交へるなどはそれである。彼の得意は世話狂言にあつて、市井の風俗と流行との穿ちに妙を得た。しかしその獨得の技能は怪談物によつて發揮された。文化文政度の代表的作家としては、どうしても彼を擧げればならぬ。一方から見れば、それだけ優れた作家がなかつたとも云へる。文化十二年十一月二十七日七十五で去つた。



の切穴より心と云ふ字の切抜を上へ引いて取る、この内蝶々番ひ飛んでゐる。どろ／＼打上げる。淺黃幕を切つて落す。

造り物、真中九尺の二重舞臺、簾かけあり、賤が一つ家の體、周圍に南瓜の蔓匍はうてある。花の間に南瓜所々に出來ある。庭先の誂にて秋草いろ／＼植ゑあり。毎もの枝折戸、すべて物淋しき秋の景色すぐに獨吟になる。

唄「うたかたの合鏡の月さへも、影見せぬ夜に戀人の、しらせか蜘蛛の糸車」とこれにて簾をあげる。お岩好みの娘の形にて糸車をとつてゐるこなしあつてお岩「白玉か何ぞと人の問ひし時、露と答へよ人の身の消ゆるは宵の稻妻か、ありやなしやの帚木\*のはかなきものは現世の境界、たのみなき世の有様ぢやなあ」と宜しく糸車をおき、科こあつて、獨吟唄「風のたよりも何處より、外れて來つらんはし鷹や」と、此時ビヨ／＼になり、何處よりか鷹それきて行燈へ止る。お岩見て科、「いづくよりかは外れ鷹の、主は誰れとも白梅の香りとめ木やとまり木に、行儀の見ゆる鷹の有様、外へはそれな尋ね來つらん」とこなし、此時

かけりになり、伊右工門、鷹狩の形よろしく、後より關口官藏立派なる奴にて、犬を牽いて出來り、花道よき所にて、伊右「それてゆく鷹の行方や穂屋の軒、たしかに彼れと見請けたり、朶を問はん案内致せ」と合方になる。官藏「へい／＼御祕藏の鷹、何でもあの家に、とくと見届けて參りませう」と門口へ來て「いや、御免下され、ちと物が問ひたい、頼みませう／＼」お岩「はい／＼、どなたで御ざりますえ」と出て來て官藏と顔見合、官藏思入「へい／＼ちと物が尋ねたい、やあ／＼滅相もない美しいものだ。いや何ぢやて、唯今これへ、あの、鷹が一羽、それでは參らなんだかな」お岩「はい唯今、鷹は外れて參りまして機嫌ようあれに止まつて居りますわいなあ」官「やあ／＼ほんにあれなる行燈に止まつて居るわい。これがほんのあんど致したと云ふもの、此由傳へん。又そもしの美しい事も傳へん、何もかも傳へて來よう」と花道へ來て「まづお喜びなされい、あの家の内に鷹は無事で居りまするて」伊「それは重寶、左様ならば、仔細なく申し受けてくりやれ」官「あゝ申し、まだ外に美しい鷹がござりまするて、あの



様な鷹を手にお据えなされたら、本望でござらう」伊「なに、美しい鷹が外にゐるとな、然らば拙者も見物ながら参らうか」官「さあ、かうお出なされませ」と門口へ來り兩人囁く。伊右工門ちよと覗き見て「なる程、これは見事な鷹ぢや、色も白斑の顔かたち」官「お氣に入つたら拳を固めて逃さぬ様に」伊「承知く、御免下され」と門口より入る。お岩伊右門と顔見合せて科あつて、「これはこれに賤しい伏屋へようこそ、鷹が参つたればこそ、斯様な家へ」伊「鷹の餌食に掃溜へ鶴のおりたる堀出者」伊「賤しからざる爪はづれ、賤が伏屋に珍らしい、定めし主ある花ならん」お岩「いえく庭もる人のなき故に、存分開く野路の花、物は言はねどそれぞとは」と科。伊「知らぬ風情の霞の袖」と思入。お岩「ひく人あらば」と科。伊「か」と思入お岩「あい」と袖にて顔をかくす……………(この間に官藏犬をつれて橋が、りに入る)……………

此時下座より官藏出て來り、菜戸の外より窺ふに兩人の姿見えす、簾下りてある故、扱はあの裡にと云ふ科にてそろく抜足をして入る。簾の隙から覗き

悔りして後に倒れ、やうく起きて此方こちらの方へ慄ひく這うて來て「たつた今迄、美しき娘と思ひの外、あの恐ろしい顔貌、それと知らずに伊右工門が」と不思議など云ふ科あつて「いや、怖しい物見たしと、今一度」と又怖々ながら覗いて見て「エ、まるで化物だ」と又慄ひく下座の方へ逃げ來り「やれ怖ろしや、こんな所に長居は無用だ」と橋懸へ逃げて入る。この時簾上る。お岩以前の化物の顔に變る、姿はやはり娘の形お岩「チエ、怨みはつきしこちの人」伊「ヤ、そちや女房お岩」お岩「エ、ねたましや」と始終どろく。鼓唄「のう恨めしや根なしごと、身は浮草の種となり」伊「今に迷うて」お岩「わが黒髪ももろ鬢、漂ふ水に浮みもやらず、遺恨は晴れぬこちの人、共に奈落につれ行かん、來やれく」伊「何を」と刀を抜き斬つけんとする途端、お岩姿を隠す。と大きなお岩の顔出る。と、ありあふ糸車火になる。と所々の南瓜皆々お岩の顔と變る詭事あり。伊右工門驚き、よき所へ立ち身になり、姿消ゆるとどろく打上げる。と右の飾附の道具みなく仕掛にて一時にどんてん



## 蛇山庵室

本舞臺三間の間。真中二重舞臺、上の方簾の生垣この所消ゆる、仕掛あり、二重真中暖簾口上手に佛壇の書割、此前に鉦撞木あり、下手鼠壁、いつもの所に門口。此外下の方柳の立樹生垣、其下に流れ灌頂誂へあり。櫛の花を立て、手桶に杓つけてある、すべて蛇山庵室の體にて道具納まる。トテンツ、にて向より講中大勢、あとより近藤源四郎、諸國順拜の形、葛籠負うて出て。

講中「サア〜御座れ〜」と花道よき所にとまり。講中「これ〜源四郎殿とやら、道々も咄した通り、あれに見えるが此頃深川から引越して来たお熊婆様の家ぢやが、最前から此方の話を聞けば、お熊殿の先の配偶との事、それは幸ぢや、こなたは知らぬが怪奇な事があつて、此頃はわしらも講中の事なら、晝夜これ百萬遍で責めかけて居るて」源四郎「それは早や忝う御座る、イヤ私も坂

東順札をせうと思つて、札所〜を打つて行くに、皆それ〜に不思議があつて、どうも心ならず、それ故一先家へ歸つて見た所が、前の所には居ず、うろ〜と尋ねる中、あの作兵衛殿に出會ひまして、詳しい話も承はり、吃驚しながら此蛇山へ来る途で、皆の講中方に逢うて、マア大きに力を得まして御座る、マ、直ぐに行きませうか」○「家へいつて咄ませう」皆々「サア〜御座れ〜」トテンツ、にて皆々門口へ来て。△「ヤア婆様や〜、此方の先の配偶源四郎殿に道で遭うて、連立つて来ましたぞや」と此聲にお熊奥より出て。お熊「何ぢや、源四郎殿が歸つたとな、やれ〜」と門口へ来て「ほんに源四郎殿ぢや、講中の衆も御太儀、この様な時は餓鬼も人数ぢや、サア〜入らしやれ〜」と此人数みな〜内へ入る。源四郎葛籠を下し、草鞋など解きて、塵打拂ひ上手へ坐る、みな〜並よく並ぶ。皆々科。源四郎「やれ〜途で講中のお衆や、あの依兵衛殿に何かの話は聞きました、何からお禮を申さうやら、大きに忝なうござります」皆々「何の〜、そりや互の事で御座る」お熊「時に親仁殿、定めて話



を聞かれたで有ろ、儕と其方との實の悴、久振で家へ戻つた其日から、何ぢややら家中へ鼠が出て、私も悴も此様に、天窓も何處も嚙附き、大抵苦しい事ぢや御座らぬ。其の許は悴が女房のおもひといふ事で御座るワイなう」源四郎「イヤモウ儕も坂東廻國に出た所が、札所くで奇怪な夢ばかり、そこで一先戻つて来たのぢやワイの」作兵衛「それは丁度よかつた、マアゆつくりと休息して、百萬遍を一緒に繰らつしやれ」皆々「オ、それがよい」源四郎「また有難いお守をいろく頂いて來ましたれば、是を悴に載かせませう、シテ悴はどこに」お熊「今はあの紙帳の中で寝てゐまする、マア後でも」源四郎「時に講中のお衆、奥へ御座つて澁茶でも」講中「ハイく勝手知つて居る故、出て呑みまする」△「時に久振ぢや、婆様に何かの咄を聞いたがよいて」皆々「サアく奥へゆきませう、親仁殿、後に逢ひませう」源四郎「マアござれござれ」と講中皆々奥へ入る。跡唄になり。「イヤお婆今日こつへ戻る道々、内の様子を講中の衆に問うたれば、か様く」と詳しい話は皆聞いた、此方や悴が悪事から、因果はめぐる車の輪、前世

此世の敵同士ぢや」お熊「これも悴の女房お岩の死靈がなす業にて、親子この様に苦しめるといふ事は、恐しい女の一念、これも悪事の報であらう、ア、情ない身の上で御座るワイのう」源四郎「今いうたこと詮ない事、又俺も悴に逢うて悪念を發起させ、出家でも勸めてやりませう」お熊「ア、これ、まだ出世する悴坊主にはなるまい」源四郎「ア、まだ其様な事ばかり、悪事をなして出世がならうか」お熊「イヤくさうでない、出世の種になるものを持つて居るから、今に大名ぢや、ともく世話さつしやれ、末がよいワイの」源四郎「エ、やつぱり熱にうかされてゐるさうな」お熊「イヤ此方は何にも知らぬ故ぢや」源四郎「マアく何は格別、奥へ往て足など休めう」お熊「マア久しぶりぢや、家でゆつくりと休ましやれ、私も一緒に奥へ行きませう」源四郎「サア御座れ」と唄になり兩人入る。トどろくになり、此時紙帳の中より伊右衛門、病ひ鉢巻、やみほうけて百日鬘にて抜刀を提げ飛んで出る。此間に講中大勢出て來て。講中「こりやく氣をたしかに持たつしやれ、持たつしやれ」と皆こめる。伊右「おのれお岩め、うぬ」



と大勢にて伊右衛門をおさへ、拔刀を無理に鞘へ納める、伊右衛門皆々を見て、「ムウ、そんなら今のは夢であつたか、ハア情ない」皆々「コレ夢でも見たのか、えらいおびえ様ぢや」伊右「ハア、此世からなる火の車、熱湯地獄の苦しみも、マア此様にはあるまいかいやい」皆々「よく／＼苦しいと見える、サア百萬遍にかからう」△「肝心の道心坊が見えぬ、私ひとかへり呼んで来よう」講中「どうぞ頼みます、その中俺等も奥で澁茶など呑んでゐよう」皆々「よからう／＼」講頭「これ氣を鎮めてゐやしやれ」皆々「サアサア御座れ／＼」と講中皆々奥へ入る。時の鐘凄き合方になり、伊右衛門、科あつて。伊右「ア、情ない、此様に成つたるも、忠義を思うてした事が、鴉の嘴とくひ違ひ、それから段々重なる悪事、今では後悔先に立たず。コレお岩、俺が悪かつた、了簡してくれよ、又小兵衛もうかんでくれ、俺が口から回向の言譯、南無阿彌陀佛／＼」と此時より奥より源四郎塔婆を持ち出で来り。源四郎「久しや悴、何かの事は詳しく聞いた、これ迄の悪逆は數へられず、其中にも罪なき女房お岩といひ、まつた小兵衛とやらを無

實の罪にて殺した其報で、其の如くの難病せめて後生の罪亡し、出家してくれ、悴伊右衛門「伊右「思ひがけなき親父様、まづは御堅勝で、それにつきまして拙者のこの難病、面目次第も御座りませぬ。しかしながら今少し望も御座れば、出家には得なりませぬ」源四郎「エ、情ない、其形になつてもまだ望の思ひたち、どうで悪い望であらうが、得心なくばたつて出家になれどはいはぬが、こりや悴、この卒塔婆は私が千遍の回向をして、俗名お岩小兵衛と記し置いたれば、自分の手づから往來の道端へ建つて置けば、せめて、無縁の人々が、往來に唱ふる念佛の功力によつて、罪障消滅する事もあらん、サ、門口へ建て、おいたがよい」と卒塔婆を伊右衛門に渡す、と受取り。伊右「そんなら此塔婆を門へ立て、回向をませう」源四郎「俺も奥へ往て、夜と共に後世をたすかのお念佛」伊右「そんなら親父さま」源四郎「悴、後かた逢ひませう」と唄になり、源四郎こなし有つて奥へ入る。伊右衛門跡に残り、卒塔婆を持ち科ある。伊右「親父様の仰せの通りこの卒塔婆をば門口へたておかは、少しは罪も減する道理、流れ灌



頂のあの傍へ、オ、さうぢや」と伊右衛門卒塔婆を持ち門口を出ると、一つ鉦  
 すぎき合方になり、流灌頂の傍へ塔婆を建て、門口へ入り手を合し。「お岩小兵  
 衛、頓生菩提、南無阿彌陀佛〜」と回向する、どろ〜寐鳥ねどりになり、焼耐火  
 もえる、と門口の流灌頂の真中より、お岩の幽霊子を抱いて出る。伊右衛門見  
 て悔りする。赤兒の泣く聲する。「又もお岩が死霊の迷ひ、殊に赤兒の泣く聲  
 は、ハテ訝かしや」とこの中始終どろ〜ねどりにて、お岩の幽霊内へ入り、  
 無言にて、立つてゐる。「エ、お岩か情ない、まだうかばずに居るか、こりや能  
 う聞けよ、汝を非義非道に殺したといふ譯ではないが、元は忠義の間違から、  
 照月の一軸が欲しさ故、邪見にあたりし事もあり、又不慮の最後もみな因果、  
 それから、俺につき纏ひ、そちと小者の小兵衛がなす怨霊で、何事も皆間違ひ  
 し出世の手がかり、一軸や墨附は所持致しても、身のありつきもならざる時宜、  
 コリヤ、現在夫の難儀を見て、それ程あく迄うらますと、モウよい加減に浮ん  
 でくれ、これ頼む、手を合して拜むワやい〜」といろいろ詫言する、お岩こ

なしある、と伊右衛門き、耳立てる思入。「ナ、何と申す、それなる忪が、則ち  
 身共と汝が間に出生した忪とな。ム、其忪を養育すれば、汝は心残らず浮むと  
 いふか、オオ氣遣致すな、守立て、大事にかけ育てる程に、心残さず成佛いた  
 せ、南無阿彌陀佛〜」とお岩聞分けて伊右衛門に子を渡す、伊右衛門取つて  
 抱く、とお岩上手へ立つ。「オ、泣くな泣くな、よい子ぢや〜」と見る内どろ  
 〜烈しうなり、抱きし赤子忽ち石の地藏にかはる、伊右衛門悔りして取隕す、  
 お岩見て、お岩「アハアハ〜〜〜」とお岩、伊右衛門の方へ指し、て心地  
 よげに笑ひながら、上手の生垣へ消ゆる。

——「いろは假名四谷怪談」

註 四谷怪談は文政八年中村座の興行である。その荒筋は鹽谷家の重寶「照月」の軸が紛失した  
 ために家は没落した。其家臣田宮伊右衛門は放埒に身を持ちくづす。妻お岩の父四谷左門は娘の行  
 末を氣遣つて引戻した。伊右衛門は復縁を迫つたが聞かれないので人知れず左門を大川端で暗殺  
 し、お岩を伴來つて同様した。こゝに伊東喜兵衛と云ふがある。もと鹽谷の臣で今は高師直に仕へ  
 てゐるが照月の軸を持つてゐる。娘お梅が伊右衛門に懸想したので計を巡らし、お岩に産後の薬と



て變相の藥を與へ、且、伊右衛門には一軸を譲る約で娘との婚姻をとりきめさせた。伊右はそれからお岩を唐遇し、初める、お岩は夫の無情と喜兵衛の殘忍とを知つて憤死する。伊右はこの時、事を以て僕小兵衛を殺しお岩と不義した様にとりつくるつた。二人の怨靈はいろ／＼の怪を現はし、遂に悪人亡び、軸は舊主家に歸つて家運再興するに終る。これは當時の巷談（貞享頃、四谷左門町にあつた事件）に忠臣藏の芝居を絡ませて作つたのである。五幕十二場の脚本。

(一) 軒屋 第五幕 蜘蛛 我がせこが來べき宵なりさ、がにのくもの振舞今宵しるしも（衣通）

○白玉 白玉か何ぞと人の問ひしとき露と 信州園原にあると云ふ木、遠くから見ると答へて消えまじものを（伊勢物語）

○帝木 分るが、近づくるとそれと分らぬと云ふ。

(二) 蛇山庵室 前場の返 水上に卒塔婆を立て、白布を釣り、

○百萬遍 念佛を百萬遍唱ふ

○寝鳥 音取。芝居で幽霊などの出端に用ひる笛、太鼓のはやし方。

類の事、浄土宗では信者が集つて千八十顆の大數珠をくり廻して念佛する。

鶏の欠伸

川柳選



## 鶏の欠伸

鶏が欠伸をしたとつんば云ひ

町内の佛捕へて猿田彦

〇かみなりを真似て腹掛やつとさせ

壁のすさむしりながらの實ばなし

瓜實を見せてかぼちやと取替へる

生んだ子に教へて貰ふ親の恩

父の目をぬき母親の臍をぬき

子の寐顔見に入る母の夕涼

添乳してつい洗濯が夢になり

享保以後 前句附の點者が多く出たがその中に柄井川柳と云ふ人が居た。この人が高點をつけた句を川柳點と呼びやがで「川柳」と云ふやうになつた。狂句即ち川柳である。柄井川柳は入右衛門と云つて淺草新堀端に住し、同寺門前の町地を差配した、談林風の俳諧を好み、點者となり無名庵川柳と號した。前句附の選者として名聲を博し月次萬句合を興行したが、その内、前句を除いても一句で意味の完いものを集めた。明和二年五月の柳權初篇はこれである。これが世好に投じ次々に續篇を二十四篇まで出した。寛政二年五月二十三日、年七十三で歿した。「風やあとで芽を吹け川柳」とは辭世である、かくして川柳は狂句の總稱となり、又柳權とも呼ぶのである。川柳は滑稽機智を以て生命とするが、人情の機微に觸れ、寸鐵肺腑を刺すの概は、この種の遊戯文學(狂歌、狂詩)、の中にあつて、立派に藝術的效果の優秀を把持したものと云はねばならぬ。この點では、川柳の一部分は既に遊戯ではないのである。

「冠附」は川柳と同じく前句附から分かれた所謂「雜俳」の一種で、川柳と兄弟分で初めの五文字は題であり、且次の句と相聯つて一句をなすものである。



居候出せば出る氣で四杯喰ひ  
 居候漂母が故事を語し草  
 居候ばかり朔日蕎麥を喰ひ  
 掛り人おほくびなりの餅を喰ひ  
 面あてに秤にかゝる居候  
 こつそりと疝癢起す居候  
 低い下女金比羅様へ願をかけ  
 呵られた下女膳立の賑かさ  
 門口に下女の親父は嘶かせ  
 湯殿から忘れた時分嫁は出る  
 嫁の年すて鐘ほどのうそをつき  
 國の母生れた文を抱き歩き  
 すりこ木でぶちまゐらせと里へ文

車引女を見るときいきみ出し  
 道ごいは一度に動く田植笠  
 火もらひの吹きく人につき當り  
 里のない女房は井戸で恐がらせ  
 恥かしい時には袖を餅につき  
 寢所をへし折つて置く獨り者  
 此仕儀でござると炬燵物を云ひ  
 〇わらち食ひまでは能因氣がつかず  
 〇さりとは又と云ふ時かき曇り  
 〇佐野の馬戸塚の坂で二度ころび  
 風ふけばどころか女房あらし也  
 仙人さまあと濡手で抱きおこし  
 食ひますかなど、文王そばへより  
 フルカ



唐は額日本は宮で年がより  
 義貞の勢はあさを踏つぶし  
 垢すりの糠のと長田世話をやき  
 氣のきかぬ人と山吹置いて逃げ  
 その暗さ早太櫻に突きあたり  
 彦さまあわが夫のうと石になり  
 五右衛門は生煮の時一首よみ  
 弟は江戸へ逃げたと須磨で云ひ  
 歸朝して一の話は蜘蛛のこと  
 かけて来たほどに娘の用はなし  
 めんくがよい女房を持つ氣なり  
 日をえつて茶をのみにゆく恥かしさ  
 花嫁はかぞへるやうに飯を食ひ

呼ばれても二針三針縫つて立ち  
 くだびれた奴が見出す一里塚  
 ちつとべいいもはあるがと村仲人  
 よく見れば手の届くだけ澁い柿  
 どこからか人の出てくる大伽藍  
 百丹那まさか衣も略されず  
 あきらめて  
 酒の意見をせぬ女房  
 母は高野の山下りる  
 道からもどる温い出刃  
 操あつりの木戸出るお乳母  
 蓋をして



御一所に汗かへる客  
夫を待つて入らぬ風呂

淋しけれ

人だえのせぬ若女めうと

人らしい人來る古跡

謠でさがす袋棚

出つ入りつ

それほび蚊帳がうれしいか

蟻ほど人が働かば

段々に

後の涙おつる襟\*

伸するやうな瓦揚げ

—「冠句選」—

註

鶏い、いの欠伸 「柳傳」から川柳數十句と「冠句選」から五種だけを抜き出した。作者は「漂母」  
誰れと分らない。市井の風俗詩人が折にふれての感興の迸りである。 ○漂母

韓信の ○金比羅 この神の 鼻は高い ○能因 「都をば霞と共にいでしかど秋風ぞ吹く白河の關」の歌を  
作つたが實は旅行に行かず餘を天日にさらしたと云ふ俗

説 ○さりこては 「理りや、日の本なれば照りもせめ、さ、雨乞小町の歌 ○佐野 源左衛門常世。坂は戸塚  
りとしてまた天が下とは」

話 ○風ふけば 「風ふけば沖つ白波立田山夜半にや君は獨 ○仙人 久米仙人墜落の話 ○食  
り越ゆらむ」(伊勢物語、謡曲河内通)

ひますか 渭水の畔に太 ○唐は 唐では魏明帝の時、章誕、高樓の扁額に書し、恐 ○義貞  
公望釣る。

稲村崎の突撃。元弘 ○垢すり 義朝が尾張野間を長田の ために湯殿で殺された。 ○氣のきかぬ 太田道灌の  
三年五月二十一日。

の暗さ 源三位頼政、紫宸殿のぬえ ○彦さま 大伴狭手彦の妾 ○五右衛門 石川氏、濱の  
退治、猪の早太は家來。

とも」の歌をよ ○弟 弟は業平の東下り、兄 ○歸朝 吉備真備が野馬 十二一重の  
んだと云ふ傳説 ○襟 襟は行平で須磨の閑居。 ○襟 襟は行平で須磨の閑居。



山  
東  
京  
傳

瓜  
茄  
隨  
喜  
功  
德  
品

江  
戶  
生  
艷  
氣  
蒲  
燒



## 江戸生艶氣蒲焼

こゝに百萬兩分限と呼ばれたる仇氣屋の一人息子艶次郎とて年も十九や二十と云ふ頃なりしが貧の病は苦にならず、外の病のなかれかしといふ身なれども生得浮氣な事を好み新内節の正本などを見ては玉木屋伊太八、浮世猪之助が身の上を羨しく思ひ一生の思出にこんな浮名の立つ仕打もあらば行く／＼は命も捨てようとはからしき事を心にかけてたり。此の艶次郎の近所に北利屋喜之介と云ふ放蕩息と、輪留井思庵と云ふ太鼓醫者あり。折々話に来る……

艶次郎は二人の者より色事の指南を受け、まづほりものが浮氣の初まりなりと心得、兩の腕、指の股まで二三十ほどちてもなき刺青をして痛いのを堪へ、こゝが命だと喜んでゐると、中には少し消えたのもなくては悪いと、所々へ灸

京傳は岩瀬傳藏(本姓は灰田)。京屋と云ふ袋物商である。愛宕山の東に當るので山東と呼んだ。名は醒字は酉星。狂名は身輕折助、畫家としては北尾政演と名乗った。寶曆十一年八月十五日深川木場町の質屋の子として生れた。年少から遊蕩を覺え、當時の十八大通の一人、文魚に知られて、腰巾着のやうであつた。十九歳の頃から畫家として立ち、草双紙の挿繪を描いた。而して戲作に筆をとつたのは天明の初めで、「黄表紙」の方面であつた。「艶氣蒲焼」の「心學早染草」はその名作である。これと殆んど同時に洒落本にその才分を發揮し、その本領を示したのが寛政三年、この種の作のために刑にふれてからは謹慎し、讀本、合巻の方面に出て來た。讀本では、「櫻姫全傳曙草紙」「昔話稻妻表紙」「本朝醉菩提」「双蝶記」などがある。しかしこの分野には馬琴がゐると、彼自身の得意の境地でないので、筆も澁りがちであつた。かくして文化十三年九月七日、五十六で歿した。思ふに京傳の文藝上の業績は江戸式輕妙にある。従つて黄表紙洒落本の世界がその天地で、この領域にあつては彼は嶄然として群少作家を抜き天下獨歩の觀がある。然るに寛政の改革の廢らした洒落本禁止は遂に彼をしてその不得意の方面に走らしめたのである。文藝家としての致命的打撃であつた事は云ふまでもない。しかし、彼の努力は馬琴と對峙するだけの世評は收め得たのであつた。猶創作以外の「近世奇跡考」「骨董集」等は風俗資料としての名著である。



をすえて消されるはちといたごと、あゝ色男になるも飛んだつらいものサ。

扱艶次郎は役者の内へ娘などの駄込ものを羨しく思ひ、近所評判の藝者おるんと云ふ踊子を五十兩にて雇ひ、かけこませるつもりにて輪留井思案より頼ませたれば駄込むばかりなら承知しましたと、おえんは早速承知して、仇氣屋の内へ泣きながら駄込む。「自らと申すは、そも寄べ定めぬころび妻、この道に住み馴れて人の心を浮氣にする白拍子でござんす。茅場町の夕薬師で、こちらの艶次郎さんを植木の蔭から見初めました。女房にする事がならずばおまんまなど焚いても居りたいのサ。それもならぬと仰しやれば死ぬ覺悟でござります」などと注文通りのせりふを竝べ立てるを、家内の下女共これを聞いて、

「内の若旦那にはれるとは千家か古流か遠州か知らぬがとんだ茶人だ」

「若旦那のお顔ではよもや、かう云ふ事はあるまいと思つたに。これ、女中さん門違ひではないかの」

「はて、色男といふものはどんな事で難儀しやうか知れぬ物だぞ、まう十兩や

るから、もそつと大きな聲で隣りまで聞えるやうに頼んだぞ」

艶次郎の親彌次右衛門は頼んだ事と知らず、氣の毒に思ひいろ／＼意見して歸す。

この噂をさぞ世間でするだらうと思ひの外、隣りでさへ知らぬ故、張合ぬけがして讀賣を頼みこのわけを板におこさせ、一人前一兩づつで雇い、江戸中を無代で賣らせる。……

ある時芝居を見て、とかく色男と云ふものは打叩かれるものと思ひ頻りにぶたれたくなり、地廻りのいさみを一人前三兩づつにて四五人頼み、仲の町の人通り多い處でぶたれる積で茶屋の二階には藤兵衛を雇ひおいてめりやすを唄はせ亂れた髪を浮名に梳かせるつもりにて、月代へは青黛をぬり、揚屋町のぎんだしにてさつと水髪に結び、たぶさを捉むと直にばら／＼と解けるやうにしてぶたれけるが、ついぶち所がわるく、氣付よ鉢よと騒ぎて、やう／＼に氣が付きけり。此時よほど馬鹿な奴だと云ふ浮き名少しはかり立ちたり。



艶次郎は世間の噂を聞くに金持故に皆慾ですると云ふを聞き、金持がいやになり、何卒勘當がうけたいと兩親に願ひけれども一人息子の事ゆえ決してならぬといひけるを、やう／＼母親の取なしにて七十五日の間勘當ときまり、日が切れると早々内に引取る事に云渡したり。艶次郎は望み通り勘當うけたれども母の方より金は入用次第送る故、何不足はなけれど、なんぞ浮氣な商賣をして見よう、色々考へたが、色男のする商賣は地紙賣だらうと、まだ夏も来ぬに地紙賣と出かけ、一日歩いて足に豆を出来し、これには少しこり／＼する。夫より又いよ／＼浮氣にのりが来てかれこれする内に七十五日の日がきれ、兩親よりは勘當を許さんと毎日の催促なれども、いまだ浮氣をし足りねば親類中の取りなしにて二十日間の日延を願ひ、やう／＼に聞すみければ、今度はぐつと上り心中して一番命を捨てる氣なれど、相方の浮名が不承知ゆえ、うそ心中のつもりにて、喜之介と思庵をやつておき、南無阿彌陀佛といふを相圖にとめさせる注文にてまづ浮名を千五百兩にて身受をし、心中の道具類を買集むる。對の小

袖の模様には肩にはかなくて、裾には碓、質においても流の身と云ふ古歌の心を學ばれたり。これも中宿山崎の儲物なり。浮名はたごひ、うそ心中にても外聞がわるいと、ごんだ不承知なりしが此案じを首尾よく勤めた跡ではすいた男と添はせてやらうと、やう／＼得心させ、此秋狂言には艶次郎が無利息で金主とする約束にて座元を頼み、櫻田に云ひつけて、この事を淨瑠璃に作らせ、立方は門之助、路考と云ふ顔にて舞臺でさせるつもり、はたきさうな芝居なり。元よりすなほに身うけては色男でないと駈落の分で櫓子を毀し、梯子をかけた二階から身受をする、内證で身請なされた女らう故、お心任になさるはいゝが、どうぞ櫓子の繕ひ代二百兩頂きたいと慾心をぞかわきける。最後の場も意氣なぱつとした處の注文にて三圍の土手ときめ、夜が更けては氣味が悪いから宵の内のつもりにて艶次郎に勤めたる茶屋、船宿、太鼓、末社、藝者ども大々講の送りの様に袴羽織にて大川橋まで送り、こゝにて皆々別れ、艶次郎は日頃の願叶ひしと心嬉しく道行をして行き、こゝこそよき最後場と宿おきの脇差をぬい



て、既にかうよと見え、南無阿彌陀佛といふを合圖に、稻村の蔭より黒装束の泥棒二人現れ出で艶次郎浮名の二人を真裸に剝取つたり。

「うぬらはどうで死ぬものだから己が介錯してやう」

「これ〜早るまい、我々は死ぬための心中ではない、こゝへ留手が出る筈じやが、どう取違つたものか、着物は皆あげませう、命ばかりはお助け〜」

「此後こんな思付はせまいか〜」

「どうでこんな事と思ひんした」……

艶次郎が、悪あんじの心中、此時ぱつと立ち、澁うちはの繪にまで書いて出されたり。

艶次郎は丁度勘當の日限もきれば、こり〜して家に歸り、ふと傍を見れば三圍にて剝がれたる小袖かけある故、不思議に思ふ折柄、親彌次右衛門、番頭候兵衛立ちいで、泥棒に姿をやつして衣類を剝ぎ取つたるは、意見のためなりと云ふを聞いて、艶次郎始めて世の中をあきらめ、まことの人となり、浮

名は男のわるいをふしようして、他へ行く氣もなく夫婦となり、本より身代に不足もなければ愈繁昌に榮えけり。しかし一生の浮名のをさめめに、今までの事を草双紙にして世間へ廣めたしと京傳へ頼み、世上の浮世人へ教訓のために書かせけるとぞ。

### 瓜茄隨喜功德品

白炭兵衛忠知の妻は、前に女子を産みてほどなくみまかり、其娘生長して、今年十七歳に到、名を夕露といひけるが、容貌美しく、萬事にかしこくして、心ばへもやさしかりければ、一人の孫とて、祖母の寵愛淺からず、掌上の珠の如くに思ひけるに偶風のこゝちとて打臥、漸々におもき病となりて、つひにはかなくなりにけり。常なき世のさがなれば、蟋の夕をまたぬならひは遁るべきにあ



らねども、わづかに十七歳を一期として、花の姿を吹ちらす、無常の風ぞあはれなる。祖母は天を仰ぎ地を敲きて、哭悲み、ともにもと物狂はしき體なるに、忠知も愛子をうしない、歎はおなじ心なれど、さすが母の老いたる身に、さはらんことをいとひ、さまざまにいひ慰めて、七日七日の佛事を營み、菩提の事懇に弔けるが、とかくして日數もやゝ過にけり。此頃京都には義政會、一子義尙君に代をゆづりて、東山に閑居し給ひ、古器古畫を弄び、茶器を聚めて樂給ふ。これより東山殿と稱しけり。銀閣を造りて、北山の金閣に准へ給ふ。しかるに忠知が茶道に達したる事を聞及び給ひ、召して其器量を見まくおぼし給ひて、内使を給はりければ、忠知は風雅をたしなみの面目と、世にありがたく思ひ、召に應じて都に上りぬ。祖母はとにかく、孫娘の世にありし時の事どもを思ひいだして、露忘れだかく、彼がめでたりし小袖手道具のたぐひ、今は遺物となりしを身に近くおきならべて、其面影と見るも、心を慰ためにはならで、かへりて涙のたねとなる。折々墓參りして、香花も手向るをせめての心放にす

るのみなり。扱一日例の如く、侍女若黨奴僕など召具して、塚のもとに詣て見れば、小草はやくもしげりあひ、かたぶく日陰に寒蟬ひぐらしの、鳴音もすゞろに物悲しく、しばし念佛をとなへて、時をうつしけるが、暮六つのかね耳ちかくひやくに驚て、家に歸らばやと思ひける、折しも三昧くさむらの蓑かさの裏より笈摺あしを看たる若き女巡禮歌をうたひつゝ出來り、お墓詣の御功德に、おん手の裏を施し給はれかしといひつゝ、破れたる扇をさしだしたるさま、美目容いやしからざる生れなり。老母は立とまりて、夕月夜の光に此女を見るに、うせぬる孫娘の夕露によく似たれば、世にはかく似たる者もありけるよと、あからめもせず打まもり、見れば見る程其儘の生うつしにて、孫娘の二度生れいでたるにかと、疑がふばかりなれば、ひたすら憐の心をこりていふやう見ればいやしからざる容儀なるが、年若き女の身一つにて巡禮するは何故ぞと問ひければ、女いはく、情深き御たづねに、何をかつゝみ申すべき。妾はみちのく信夫の里の浪人の娘なるが、父身まかりて後、盲目たる母もろとも、西國巡禮に出はべるに、母も



當地にて身まかり、我身一つ取残されて、旅路に迷ひ候へども古郷に歸る路錢もなく、せんかたなさに、夜は此邊に野宿して、晝は往來の人の袖にすがり、一錢二錢のなさをうけて、露命をつなぐかなしき身にて候といひさして、さめくと泣きければ、老母はますく不便に思ひ、名は何と云ぞ、年はいくつと問けるに、名は文字摺と申し、年は十七になり候と答れば、年も又うせぬる孫と同年なり。よく似たる事かと思ひつゝ、若我心の迷の僻目かと、侍女等にむかひ、此女夕露によく似たりと思ふが、汝等が目にはいかに見ゆるぞといへば、侍女等口を等して、さきほどより、我々もさこそ存じ候なれ。誠に生うつしにて候といへば、扱は我僻目にもあらずとおもひて女にむかひ、我は當地の縣を司る者の母なり。今の物語にてはさぞ難儀なるべければ、我宿所に連ゆきて、しばしの程養ひおき、古郷へおくりつかはすべしといへば、女は世にもうれしげにて、唯掌を合て拜みつゝ、ありがた涙に咽びけり。かくて老母は、かの女を連れかへり、侍女等におほせて、浴をさせ、髪とりあげさせ、新衣を

著かへなどして見るに、美目容はさらなり、ものごし立ふるまひ聲様にいたるまで、亡人に露ばかりもたがはざれば、再び孫娘を見る心地して、側ちかく召仕に、よろづに賢くまめやかにて、よく老母の心を察し、欲掻かきかきに手のとやくがごとくなれば、ますくいつくしみ、忠知都より歸ば相議して、かれが古郷に人をつかはし、改めて侍女に召抱ゆべしと思ひ、忠知のかへるを待たぬ。

かくて又一月ばかり過けるに、老母こゝちあしきとて、かりそめに臥、漸々に病まさりて惱ければ、老臣穗波垣右衛門を始として、家内の者大に驚、良醫をえらみむかへて、療治をくはへけれども、露ほども其驗見えざれば、老年の大病こゝろもなく思ひ、穗波任助を飛脚として、都にのぼせ、此事を忠知に告たりけり。かの文字摺は晝夜病床をはなれず、懇に看病し、外の侍女らは、深夜にいたれば疲れて睡がちなれども、文字摺は少も睡らず介抱に心を盡しぬ。偕忠知は、東山殿のおぼしめしにかなひ、都にしばらく逗留してゐたりけるに、任助早馬にてかけつけ、老母大病のよしを告たりければ、忠知はかねて



孝心深き人なれば、大に驚き、義政公に其ことをきこえあげて、暇をたまはり、早駕籠にて宿所に歸り、旅装束の儘、母の病床に近づき、容體をつらく見るに、いかさま重く見えければ、愁ふ事限なく、衣服を着かへて別間に出、垣右衛門を召て、醫療の事を談じ居たるに、取次の者まかりいで、母ぎみ御病氣の御見舞として、芦屋里の何某方よりさし上たる、折櫃の蓬餅、煎餅。灘浦の鹽焼の翁のもとよりさし上たる、魚一折、海苔一台。水無湫の下司よりさし上たる、養老酒一陶、白砂糖一壺、御覽あるべしと披露して、目通りにならぶれば、忠知いち／＼にこれを見て、かたはらに運び置かしめ、垣右衛門にむかひ、母のかたはらにありて看病する女は、何者ぞと尋ねれば、垣右衛門、かやう／＼に候と、其子細を物語る。忠知これを聞、我彼女に逢ふべし。爰に連來れといふにぞ、垣右衛門長まりて候とて、彼所にゆき、文字摺をつれて出來りけるに、文字摺はうや／＼しく手をつかへてぞ居たりける。忠知かれをつらく見て、いかさま亡せぬる娘によく似たりといひて、訝しみつゝ見居たりける折しも、

任助まかりいで、母公御病氣の御見舞とて、一休和尚御出に候といへば、文字摺は、これを聞とひとしく色を失なひ、ものをもいはず次の間へ遊行んとするを、忠知手ばやく、文字摺が襟首つかみて引もどす。かゝる所へ一休和尚野曝悟助を具して入來り給ひ、文字摺を屹と御覽じて、汝畜生の身にて、何とて人に交るぞと喝し給へば、文字摺は髪ふり亂してすくとたち、あな口惜や残念や。此家の老母を誑惑かし、夜な／＼毒氣をはきかけて、病人となし、つひには一命をとりて、忠知に仇を報んと計りしに、事半にして見露はされたる無念さよとよばはり、面色變りて齒がみをなし、忽ち明障子を踢破りて、虚空をさして飛上る。一休忠知にむかひ、はやく彼を射候へとのたまへば、忠知かぬて射術の達人なれば、心得候といひもあへず、書院におきつる弓をとり、箭をつがへて縁さきにをどりいで、虚空にむかひて漂と放つ、其矢あやまたず變化のもの、胸さかを、篋深にぐさと射通ければ、やがて地上に撲地と落たり。一休野曝に下知し給へば、悟助庭に飛下りてこれを押へたるに、これ大なる古狐にて、矢



につらぬかれて死したりけり。垣右衛門任助親子を始、家内の男女これを見て、唯あきれたるばかりなり、時に忠知いひけるは、某過し比泉州堺、皇子がうへの化地藏を斬たることあり。察するところ此古狐はかの地藏につきて、往來の人を惱せたるに疑なし。某に斬れたる仇を報るんとて、娘に似たる女と化し、母を誑かして病人となしたるならん。身うちには必ず疵あるべしといふにぞ、悟助狐の身上をあらため見るに、果して首のきはに疵の癒たるあとありけり。一休打うなづき、さこそあるべけれどたまひつゝ、彼方に据る竝べたる進物の品々を見やり給ひ、其物をこれへとて取寄せて、いち／＼に見給ひ、これ一つとして正眞の物にあらず。且此折の裏をひらき見よ。打見にはときならぬ蓬餅と見ゆれども、これをば庭の泉水に捨て見るべし、と仰せければ、任助立つて、かの折を取泉水に打あけしに、件の草餅みな青蛙となりて水中に飛入ぬ。これとはと皆々膽をつぶせば、一休のたまはく、いやそれのみにあらず。此品々いづれも皆さのごとくなるべし。此煎餅の折をひらきて見よとおほせけるに、ひら

けば秋の風に散る柿の葉の黄色なるに、桐の朽葉をまじへたり。灘浦の海苔一包をひらけば、これもおなじく落葉の塵を吹きとちし、土蜘蛛の巢なりけり。魚と見えしは朽木の根にて、一陶の酒は種とる瓠瓜かぶらに、いづその雨の降たまりのくさり、残しものなりけり。一壺の白砂糖と見えしは、芥川の流の細石、眞白なる砂なり。人々ます／＼驚けば、一休のたまはく、是みな妖狐の仕業なり。

此狐は泉州槇尾山の奥、七層ななこし峠の岩窟に年ひさしく住みおのれが年數を経るにしがひ、妖魔の通力を得て、これまであまたの人を害せり。忠知どの、弓勢にあらずば、いかでか射おとすこと能ふべき。諸人の災をのぞきしこと、大なる功德なり。老母の病もやがて快氣あるべしとのたまへば、忠知いはく、今更申すも愚なることながら、人情の變化を察し給ふのみならず、妖魔の氣までを、かく先だちて、知せ給ふありがたさよ。禪師の御蔭によらずんば、妖狐に母の一命をとらるべし。危かりしことなりといへば、垣右衛門、任助親子は、ます／＼一休の神通を感じけり。かくて老母の病は日々におこたり、つひに全快に



いたりければ、忠知を始家内一同に喜ぶことかぎりなし。儲程なく盂蘭盆の時になり、亡し夕露が亡霊をむかふる新盆なればと、老母のねがひにて、一休を請待しけるに、一休來りたまひ、靈棚にそなへたる、牛馬の形に造たる瓜茄子をとりて手向の水鉢に打入給ひ、机にすゑて黙し給へば、いかなる經をか讀み給ふと、みなく音をやめ耳をそばだて、聞居たるに、一休拂子を打ふりてのたまはく、

山城の瓜や茄子をそのまゝに、手向にするや加茂川の水

とあそばし、これにて回向すみぬとて、他の詞はなく飄々として歸給ひぬ。忠知の本領は、山城の鴨河なれば、かくはあそばしけるとなん。此歌の意を知る者は、忠知一人なれば亡し娘の佛果を得んことうたがひなしと思ひつゝ、ひたすら喜びけるとかや。

——「本朝醉菩提」——

註 (一)江戸、生艶氣蒲焼

天明五年の黄表紙である。主人公艶次郎の繪つらの鼻が特別製の獅子鼻の鼻をいろく、の作に出して喝采を得た。○新内 江戸淨るりの一種、鶴賀新内が創めた。○玉木屋 新内節の「歸咲名殘命毛」の主人公、玉木屋伊太八。女は堺屋の尾上。延享三年十二月十三日の心中未遂事件で、男の本名は、津輕浪人の原田伊太夫である。○浮世猪之助 これが男。女は若葉屋若草。○夕薬師 南茅場町にあり、毎月、八日十二日が縁日。○千家 千利休の茶道。古流は松應齋涼字が祖で、花道。遠州も花で小堀遠江守政一が祖。○めりやす 三味線唄の端唄の一種、享保の頃鳥羽屋三右衛門が芝居の合方か。○地紙賣 扇の地紙を賣る。○櫻田 狂言作者、治助のこと、二世を指せしものか。○三圍 隅田川東岸小梅村、大川橋とは吾妻橋の事。○瓜茄隨喜 江戸中期以後の行商。○櫻田 狂言作者、治助のこと、二世を指せしものか。○三圍 隅田川東岸小梅村、大川橋とは吾妻橋の事。○瓜茄隨喜 文化五年の「本朝醉菩提」卷七にある第十三を採つた。此作は文化三年の「昔語稻妻表」紙の續篇と銘打つてゐるが、要するに一休傳説を中心とする浪漫的作品である。この一節の如き、其出所は、「續一休咄」卷一の「一休和尚狐の妖怪をしり玉ふ事」にある。○件の草餅 以下の文章は「續一休咄」のそれと大差がない。



狂  
歌  
選

名  
越  
の  
歌



## 名越の歌

蓄へもみな月はてゝ一文も今日はなごしのはらへだにせず  
 郭公みそかに鳴きて過ぐる夜はあとに残れる月かげもなし  
 よせざれと見ゆるお寺の錦かなどこも彼處もはぎだらけにて

(葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて)

——「朱樂菅江」——

\* 菜もなき膳に哀は知られけりしぎ焼茄子の秋の夕ぐれ  
 \* から臼の音うちやめば小夜砧耳についたる夕顔の宿  
 世にたつは苦しかりけり腰屏風まがりなりには折れかゞめども

——「唐衣橋州」——

\* 山吹のはな紙ばかり金入にみの一つだになきぞかなしき

朱樂菅江 名は山崎景貫。御手先與力で牛込二十騎町に住む。俳名を貫立と云つたので、友人が貫公々々と呼んだ。即ちとつて菅江の號とした。寛政十、十二、十二、年六十一。唐衣橋州 田安家の士、小島源之助、字恭從。四谷忍原横町に住む。蜀山と共に狂歌中興の中心人物である享和二、七、十八、年六十。

大屋裏住 白河の士。久須美孫兵衛、仕を辭して江戸坂本町に更紗商を出し、白子屋孫右衛門と稱す、狂歌では李綱の弟子。文化七、五、一、年七十七。

元 李綱 大野屋喜三郎。京橋北紺屋町の湯屋である。畫を嵩谷に學ぶ。老後、隅田川邊に住む文化八、六、二八、年八十一。妻はるも智恵内子として狂歌に巧みであつた(文化四年歿)。

手柄岡持 秋田の士、平澤平格。初め狂名を淺黄裏成と云ひ、後改めた。俳名月成、狂詩では韓長齡、また戯作では明誠堂喜三二とて有名である文化十、五、二十、年、七十

九。鹿部部真歌。北川嘉兵衛 數寄屋河岸の家主で汁粉屋。蜀山を師とした。寛政十一年には二條家から宗匠免許を得た程、名聲があつた。晩年零落し、文化十二、六、六、年七十七。

四方赤良 蜀山人、太田直次郎の狂歌の號である(蜀山の條参照)。  
 宿屋飯盛 石川雅望の狂名(その條を見よ)。



雀どのお宿はどこかしらねどもちよつちよとござれさゝの相手に

——「四方赤良」——

鶯も蛙も同じ歌仲間経よむもあり歌よむもあり

うき事もかたるは今か初昔のちむかしまで別儀あらじな(寄茶戀)

——「大屋裏住」——

汗水を流して習ふ劍術のやくにもたゝぬ御代ぞめでたき

花の時たばかりれたる雲なればゆだんはならず秋の夜の月

——「元全綱」——

心なきと隙のなきとにかへてまし病ある身と苦勞ある身と

けふ神のお立なればや風をあらみ空さやけくも木葉みだるゝ

——「手柄岡持」——

争はぬ風の柳のいごにこそ勘忍ぶくろぬふべかりけり

猿のすむ野邊とも知らず旅寝してうまさき都の夢やくはれし

——「鹿部部眞顔」——

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまるものかは

人は武士花はよしの野山までも腰にはしやんとさいてこそあれ

竹の子を堀らんとするを秋までに延ばして杖に切るも孝行

——「宿屋飯盛」——

註 名越の祓 狂歌のうちから重なる人の作をぬき 西行の鳴立澤の歌 〇菜もなき から脱化した作 〇から白

源氏物語、夕顔巻、五條の 茅屋の曉方の敘述に據る 〇山吹 太田道灌に關する、山吹の傳説。 〇鶯も 紀貫之の「古 になく鶯、水に蛙の聲をきけば、いきとし 〇歌よみ 「力をも入れずして天地を動かす」 〇竹 生けるものいづれか歌をよまさりける」と云へる古今集序の句がある。 支那二十四孝(郭居業の編成したもの)と傳ふ。 の子 支那二十四孝(郭居業の編成したもの)と傳ふ。 の子 支那二十四孝(郭居業の編成したもの)と傳ふ。

△狂歌は和歌に現はれた俳諧歌や戦記文學に出てる落首の流れを汲むもので、近世初期 には、半井卜養、石田末得、寶藏坊信海、永田貞柳なきによつて京阪を中心として盛ん になつた。それが天明頃になるころに採録した人々(赤良、菅江、橘州等)や、酒上



不埒紀定丸、山手白人なき多士濟々でその勢ひ一時天下を風靡した。次で飯盛、眞顔  
 芍藥亭長根を興したが爾後復た振はずして遂に明治に到つた。一體、狂歌の文學的價  
 値は極めて低い。奇警な場當り古歌の滑稽化を主とした洒落地の領域を脱しきら  
 ないもので、謂はゞ鎔閑の遊戯、泰平の餘澤にすぎぬ。たゞ爛熟した江戸文化の側面  
 を語るものとしては逸すべからざる資材であらう。

式亭三馬

言葉  
 孔叢  
 爭先  
 生ひ



三馬は菊地久徳と云ひ、通稱を西宮大助と呼んだ。父は八丈島爲朝社の祠官菊地壹岐守の庶子で茂兵衛と云ひ版木師であつた。三馬は安永四年淺草田原町で生れた、彼は地本問屋西宮新六(或は翫月堂)の丁稚となり手代となつた。それと共に伯母が邸勤めをしてゐたので、屢々訪問して、稗史草双紙の類を涉獵した。十八歳の時「天道浮世星採」を出したが、寛政十一年「俠太平記向鉢巻」で火消人足の喧嘩を材料としたので一騒動を惹起し、三馬は罰せられたが、そのため名聲を擧げ「雷太郎強惡物語」を出して小説界に一轉化を示し、ますます認めらるゝに至つた。彼の作は、洒落本、黄表紙、讀本、合巻と各方面に互つてゐるが、その本領は、滑稽諷刺にあつて、「四十八癖」「早替胸機關」「浮世風呂」「浮世床」はその代表的のものであらう。特に「浮世風呂」は(文化三年—九年)四篇、「浮世床」(文化六年—文政三年)三篇は彼の長所短所が最もよく現はれてゐる。彼の諷刺は何となく底氣味の悪い、いちわるさが閃めいてゐる。それが鋭くも響くも又、嫌味になる事もある。しかし、江戸の文藝家中にあつて獨得の才能を持った男で、その優秀な地位を否定する事はできまい。文政以後は大酒の結果病身となり、同五年正月六日、四十八歳を一期として去つた。因に三馬の號は若年の頃、唐來三和、立川馬馬の二人を重んじ、その名をつなぎ合はしたのだと云ふ。

### 言葉争ひ

かみがたすちの女、すんぐりとした風俗、いろ白にてくちびるあつく、目のふちは紅のぼかし、口紅くろ光りに濃くぬり、ふとい笄を、白紙にてぐるぐるとまきたるは、湯氣にて、べつかうのそらぬためなり。かあいらしい聲にて、かみがた「お山さん、えらう寒いな。何じやと、トトモウ、此間はお腹の偶合がわるうて、夜さり毎に腹痛でづつないはいな。それじやさかい、風呂になど入つて、温めてこまそと思つて、なアんぼも入つてぢやはいな。お山さん、あれ見イ。お家さんの傍に立て居なます嬰兒さんを見イな。ありや何色じやしらん」お山「あれかエ、あれは紅かけ花色といふのさ」。かみ「いつから能う染てじやなア」。山「薄紫といふやうなあんばいで、いきだねへ」。かみ「いつから粹じや。こ



ちや江戸むらさきなら大好く。こちやあないな着物がしてほしいわエ、お山さん、あつちや向んか。」山「ながしておくれか。夫はおはかりだ子。かみ「なんのいな。テモ能う肥てじやな。」山「いやよ。太ッちやうはしみく、舌だ。酢でも呑んで瘦たいよ。」かみ「なんのママ、肥たが能じやないかいな。」山「それでもおまへ、ほつそりすうわり柳腰さへいふじやアねへか。」かみ「かいな、こちやまた、風負せいで能かと思うた。わしなど走競せうなら。横にねて轉る方が、やつと速じや。」山「ハ、ハ、ハ、ハ、モウ四ツを打たか子。」かみ「何いひじやいな。つウツと最前打てじや。最うやんがて晝じやがな。」山「さうかエ。日は短い子エ。」かみ「さいな。これから往たら、わし所へお出て飯食んか。上の風に丸を料理して食て見たいと、千度いうても、トトモウ、内のが耳潰してじやつたが、今日はどうしてやら丸焚て食はそと、此様に云てじやさかい、晝は丸じや。」山「丸とは何だエ。」かみ「御當地でいふ鼈じやがな、おまへも食て見い。」山「ヲヤいやよ。おつかねへ。鼈なんざ見るもいや。丸を焚くいひなはるから、麥飯かど

思つたら、鼈かへ。ヲヲ氣味のわりい。江戸じやアね、鼈をしやれて蓋といひやすよ。」かみ「何じや、蓋、あほらしい。蓋とはママなんのこつちやいな。」山「蓋の様だから蓋さ。上方の丸とはなせだねへ。」かみ「甲が丸いさかい、丸じやわいな。」山「そんなら、どつちらも五分くのこちつけど子。」かみ「さいな。御當地の鼈煮くといふはな、どないな仕方じやと思ふたら、あほらしいママ、吸物ぢや無て、上でいふ轉熬じやさかい、鹽が辛うて、トトやくたいじや。上の拵方は、又あないなもみないもんじやない。第一が薄したちで吸物じやさかい、酒の下酒になどせうものなら、いつかう能じや。こちや最う大好く。鱸なども御當地のは、和いばかりでもみないがナ、上の鱸といふたらママ、どないなもんじやい。名高い所がママ、京で上の生洲ナ、大坂で大正ナ、その外に川魚屋もまだまあ多とあれどナ、玉といふたら等的等じや。何じやうとママ、鐵串にさして焼くや、ハ、その焼いた跡で、能程づつに切てナ平に入れてぎつしりと蓋して出すさかいに、なんぼでもさめるといふ案じがないわいな。」山「江戸じ



やア、そんなけちな事は流行らねへのさ。江戸前の蒲焼は、ぼつぼと湯氣の立のを、皿へならべて出す。たべるうちにさめたらその儘置いて、お代りの焼立をたべるが江戸子さ。さめると猫に持行て遣らうと竹の皮へ包んで、歸る人は、よつほど勘定高な人さ。「かみ」デおますか。夫がマア、何で江戸子じやナ。物の廢にならんやうにしてこそ。自慢したか能はいナ。いしこらしう江戸子じや何たら角たら云うても、上の者の目から見ても、トトやくたいじやがな。自慢らしういふことが皆へこたこじや。じやによつて、江戸子はへげたれじやといふはいな。山「へげたれでも能のさ。江戸ツ子のありがたさには、生れ落から死まで、生れた土地を一寸も離れねへよ。アイ、おめへがたのやうに、京でうまれて大阪に住つたり、さまざまにまごつき廻つても、あげくのはてはありがたいお江戸だから、けふまで暮してゐるじやアねへかナ。夫だから、おめへがたの事を、上方せへろくといふはな。」かみ「せへろくとはなんのこつちやエ。」山「さいろくト。」かみ「さいろくとはなんのこちやエ。」山「しれすばいゝわな。」かみ「へ

へ關東べいが、さいろくをせへろくと、けたいな詞つきじやナア。お慮外も、おりよげへ、観音さまも、かんのんさま、なんのこつちやろな。さうだから斯だからト、あのまア、からとはなんじやエ。」山「から」だから「から」さ。故といふことよ。そしてまた、上方の「さかい」とはなんだへ。「かみ「さかい」とはナ、物の境目じや。ハ、物の限る所が境じやによつて、さうじやさかいに、斯したさかいと云のじやはいな。」山「そんならはいはうかへ。江戸詞の「から」をわらひなはるが、百人一首の歌に何とあるエ。」かみ「ソレト、最う百人一首じや。アハ、首じやない百人一首じやはいな。まだまア、「しやくにんし」トはいはいで頼母しいナ。」山「そりやア、わたしが云損にもしろさ。」かみ「みぞこねへ、じやない、云損じや。えらう聞づらいナ。芝居など見るに、今が最期だ。觀念何たらいふたり、大願成就、忝ねへ。何の角のいうて、萬歳の才藏のと、ぎつばな男が云うてじやが、ひかり人のないさかい、よう濟んである。」山「そりやく、上方もわるいく。ぎつば。ひかり人ツサ。ひかるとは稻妻かへ。おつた子エ。



江戸では叱るといふのさ。アイそんな片言を申ません。」かみ「ぎつばひかる、なるほどこりや、私が誤つた。そしたら其、百人一首は何のこつちやエ。」山「からといふ詞の譯さ。能お聞よ。百人一首の歌に、文屋康秀、吹からに、秋の草木のしほるればト、あるよ。ソレ、吹からに子、よいかへ。吹ゆへにといふことを、吹くからにさ、なんぼ上方でさかいさかいと云ても、吹さかい、秋の草木のしほるればとは、詠みはいたしやせん。」かみ「なる程さう聞きや、おまへのがほんまに尤らしいが、ハテ、云や何でもいはれるはいな。」山「大願成就でもなんでも、利口をじこうといつたり、立派をぎつば、狐をけつねといふより能のさ。五音相通とか、何とかがなつてゐるから、むりじやアねへと、此中も、博識ももしりな人がおはなしたつけ。延引だの観音だのと、あいうえおの上へ、むの字が乗れば、五音相通で、恩愛、観音、延引、善悪ぜんあくなどといふものだと、能く教なすつたから、今度おめへが江戸詞を笑つたら、一番しめてやらうと思つて待てゐたはな。」かみ「さうかいな。そんならまア、かんのんも能はト、偕また關東

べいじや、どうしべい、斯しべい、行くべい、歸るべいとは、偕見どうむないナア。」山「それも子、萬葉集とやら、その外神さまの時分の本に子、べい〜詞があるとき。可べいとは可しといふことで、行へい歸るべいは、可行可歸といふ詞で、いまでも萬葉とやらの歌よみは、べい詞を遣ふさうさ。この事も一緒に聞いて置て、内へ書付て置たから、その歌や詞を來て見なせへ。えなかこは鄙言の、何ちふことだの、角ちふことだのといふのも、ちふとは、「といふ」といふ詞を詰つたので、古い詞だから頼もしいとお云だよ。」かみ「なんのいな。べい〜詞が何で譯があるぞいな。」山「譯がなくつてさ。うそなら、わつちが内へ來て書付を見なせへ。」かみ「ハア、ちと見よかいナ。何なと賭にせうかい。私がまけたらナ、醜あまざけなど、大福餅など立ちよはいナ。おまへ又何なと立てさんせ。」山「立るとはへ。」かみ「振舞の事ちや。」山「おごるのか。」かみ「さいな。」山「ム、わつちが負たら鱧を貳朱はづまう。」かみ「こりや能はいな。」山「アいた〜〜〜、ヲ、いたいよ。おめへはまア、調子に乗つて脊中を痛くおこすりだよ。モウよいよ。」か



「ハ、ハ、ハ、ハ、拍子にかゝつてヲ、しんど。」山「サアおまへの脊中をお出し。」  
 かみ「又遺趣がへしに、えらいことすまいぞや。是とうじやいなお山さん。ア  
 いた、アいた、ア毒性なお方なア。いつこ面倒なら放つておかせ。アいた、ア  
 いた、何しいじやな。痛さがたまらんはいナ。灸があるさかい、味能うながし  
 いな。アいた、アいたくくくくくくくくくく。」

——「浮世風呂」——

## 孔 糞 先 生

油でにしまれたやうなる太織の綿入、藍びらうどの紋付、すそからぼろをさげ  
 て、なぎなたなりのさうりをはき、あたまは月代ぼうく、ひげむしやくしや  
 として、じゝむさき事いはんかたなし。そのくせに、氣象たかく辯舌滔々とし

て、高慢を吐くは、素讀指南の先生、社盟をかきあつめて、やうやく五六輩に  
 過ぎる貧書生と見えたり。残念関子齋といふ古風なる口癖あり。生國は、いづ  
 れ片田舎の者、遊學の間四五年になれど、江戸のことはむちやなり。孔糞「どう  
 だ主人夙<sup>\*</sup>に起き夜に寝てかせぐものだの。」びん「ヤこれは先生さん、お早うござ  
 います。」先生といふには、なめげにきこゆるとて、先生さんと様をつけていふ  
 なり。孔「おれは清貧を樂む氣だから、早く起る氣もないが、家鹿の爲に起され  
 た。ヤあたけてくどうもならぬ。」びん「嘉六が酒にでも酔て來やしたが子。」孔  
 「此男は何をいふ。鼠が酒に酔てたまるものか。ハ、ハ、ハ。」びん「ヘエ、わつち  
 は又筋向の嘉六が、例の生酔であたけたかと思ひやした。」孔「何さ、家鹿とは  
 鼠の異名さ。」びん「ヘエ、鼠にも表徳<sup>\*</sup>がござへやすか子。」孔「表徳かはしらぬが、  
 社君だの、家兔だのと種く異名があるて、そばからさし出て、とめ「左官だの  
 壁だのとつけるも、尤だ子。あいつが壁へ穴を明ちやア左官騒ぎだ。」びん「べら  
 ぼうめ、だまつ居ろ。」とめ「アイト、へこんで門口をさうぢしてゐる。孔「獨居



して居ると、鼠までが馬鹿に仕をる。一屋無猫老鼠走白晝と左傳にもある通り、おれを悔てどうもならぬ。王肅が逐鼠丸でも欲しいものだア。」とめ「逐鼠丸とは、京傳の本に書てありやす。直さま買へやすはな。」びん「馬鹿アいへ。あれは讀書丸だは。」とめ「ホンニさうだつけ。」孔「ドリヤ一ツ刺てもらはうか」ト、こし高のたらひへ湯をくみ、さかやきをもんでゐる。びん「コレ留、モット敷居の脇を能く掃けエ、いけぞんせへなべらぼうだ。いくら云ても掃落しやアがる。」とめ「アイ。」孔「帚千里、惟留が掃ざる所なりだ。アハ、、、。留は奥を潤し、床は身を潤すといふから、髪結床の隙には、奥の用をたして、水でも汲がい。」とめ「きついいお世話さ。関子齋めエ。」孔「ナンダ関子齋だ。ア黄白には富たいものだナ。汝が們までおれを安じをる。ハテ残念関子齋。」とめ「ヲットまづ一ツ関子齋。」三人「ハ、、、。孔糞毛受をもつて腰をかくる。びん五郎は髪をとかす。孔糞むかふのかべに、張付ある寄のびらを見つめてゐたりが、孔「ハ、ア竹本祖太夫、鶴澤蟻鳳、ハテおつな事があるの。漢には賈太夫などといふも有た

れど、日本には奇しい。尤秦の始皇帝が、松に太夫の官をば與へたが、竹に祖太夫の官をやつた故事も覺ずト、偕又鶴澤と置て、蟻鳳と對を取つた心はどういふ意であらうナ。コレ主人、あの書たものは何にするのだ。」びん「どれエ。」孔「あれ」ト、ゆびさす。びん「あれは坐敷淨瑠璃さ。祖太夫に蟻鳳だから、夕も三百ばかり這入やした。」孔「ム、」トハ、いへども根からわからず。孔「ハテナ、おれは俗事にうといからさんと解せぬ。」又こちらを見て孔「今昔物語ト、何だ朝寢房、夢羅久、フウト、かんがへ、林屋正藏、ハテナ、風流八人藝すハ、ア、これは所謂季氏が八偕のたぐひと見えるナ。此季氏も魯國の太夫だて、偕は舞列也リ。天子は八ツ、諸侯は六ツ、太夫は四ツ、士は二ツ、偕する毎に、人致其偕數の如し。」びん「モシ、夫は何の數でござりますエ。」孔「是は八偕と云て舞の數だ。」びん「わつちは又、おつに氣どりやした。アハ、、、。あれはそんな六かしい物ぢやアござりやせん。八人藝と云て、一人で八人の藝をする盲人さ。」孔「ハテナ、盲人ですら八人の業をするに、おれは兩の眼を持てゐて、一人



の行ひがつとまらぬとは、ハテ残念関子齋。」留「そりや二ツ。」三人「アハ、ハ、ハ、」孔「あの何はどうか。今と云字の書いてあるのは、」びん「ム、あれは今昔物語さ。朝寝房夢羅久、林屋正藏、こつちらの方が圓生さ。どれも上手な咄家さす」ト、はなしてゐる所へ、でんぼう一人ずつと来て立てゐる。びん「お早いの。」でん「アイ其つぎか。」びん「まだ隠居さんが一ツある。」でん「よし。」孔「コレ主人咄家とはどうしたものだ。」びん「落話をする手合さ。」孔「ム、笑話か。笑話は漢がおもしろい。山中一夕話の事を、開卷一笑ともいふが、又各別だて、笑々道人が作ったものだ。まだ、遊戯主人が笑林廣記、和本にも岡白駒が譯した開口新語、あるひは笑府のたぐひ、イヤどうも漢は違つたものだて。あの趣向をきやつ等に教てやりたい」などと、云ひたがるもの也。からの話を日本に譯し、あるひは翻案してゐることはしらす。こゝが村學究のもちまへ也。びん「唐にも落咄がありますかす。」孔「あるともく日本のやうな事ではない。甚だ巧なものだ。」そばから口を出して、びん「唐はどうだかしらねへが、江戸の咄家

はどれも上手だせへ。夢羅久が咄するのは眞の咄だせのう。」びん「さうさ。林屋がのもおもしれへよ。」でん「おらア圓生がをかくして能。」びん「始終をかしいの。」でん「夢羅久のは地が能。どうも情合をうまくいふせへ。」びん「可樂は一世一代をしたぢやアねへか。」でん「夫でもスケに出らア。」びん「助高屋だの、一世一代をした跡が、又若がへるものよ。」孔「コレく足下の一世一代といふは誤だ。それでも重言になるて、あれは一世一度といふものだ。咄家く、何でも家の字さへ付ればよいことゝ思ふが、咄家と云ては湯桶訓だ。咄は訓なり。家は漢音だ。吳音では家とよむでな。都て儒學は漢音、國學は吳音でよむが、又佛氏の方なども吳音でよむ。それは各別、笑話家とか、或は落句にをかしみを取るゆゑ、落話家ともいへばよいに、咄家とはイヤハヤ實に絶倒。ハ、ハ、ハ、すでに古方家後世家は漢音、二條家萬葉家は吳音で唱へる。是等の事を辨へぬとは、ハテ残念関子齋。」でんぼう「そんなら咄家をやめて、笑話家といひやせうね。」びん「しかし今のきいたふうは、何でも家の字を付たがるよ。」孔「口を能しやべるもの



を多辯家、物を多く食ふ者を食亂家、或は飽食家。「でん」酒をよく飲む者を飲家と云ちやア、夏うるさがるやうだの。」孔「それが則湯桶訓だて、酒を呑ものを酒客、酒屋を酒家。」びん「ハ、ア酒屋が酒家ならば、豆腐やは豆腐家だの。」でん「提燈屋が提燈家で、煎餅屋が煎餅家。」びん「馬によく騎る人を馬家と云たら腹を立つだらう。」でん「香をかぐ人を香家と云ちやア穢らしいの。」孔「さういはれてはたまらぬ。コレ〜香をかぐ花をさすなどの詞は古いけれど、まづ花を活ける香はきくといふが俗例で耳だたぬてナ。」でん「香は鼻で嗅ぐだらう。」びん「さうさ耳へ匂ふはづがねへ。」びん「耳できくものなら、香をきくといふは能けれど、鼻だからかぐ方がよからうせ。」びん「さうよ。鼻がきいて、耳で嗅う物なら、目が言うて口で見物だの。」でん「さう成と足で頭痛がして天意で踏貫の用心だ。」孔「コレ〜足下のやうに言うては論が干ない。ア、こまつたものだ。是だから聖人もおこりなすつた事想像されるテ。どうも度しがたい。アツア夷狄に素しては夷狄を行ひ、郷に入ては郷にしたがふだ。ア情ない。實に嘆息す

るのみだ。衆人濁酒を飲ば、われも共に飲ねばならぬかい。」びん「實に痰嗽をするなら、濁酒な毒だらう子。それはおやめなせへ。」孔「イヤサ、もう對手にならぬて。」でん「モシ〜もうちつとお講釋を聞てへ子。」孔「イヤ〜愚人と論は無益なり。イヤしからば」ト歸る。

——「浮世床」——

註 (一)言葉争ひ 「浮世風呂」二篇上(文化六年)「朝湯より晝前のありさまの中よりとる。江戸女と上方女の言葉の揚足取りの場であるが、双方言葉は各々本文に説明してある通りである。○鱧 「大阪にてはその調理(鰻の蒲焼)江戸のものより少しく違ひ醤油の鹽梅等江戸人の口に適せざりしが天保の末、全く江戸前の調理によれり(浪花の風)」。○江戸前の蒲焼 天明の頃、濱町河岸に大黒屋と云ふ鰻屋ありき、これ江戸に於ける鰻屋の初めなる尋常ならざると面白しとて世に賞訖せられたりと(同上)。○さいろく 才六。丁稚、小者。○百人一首 宇都宮頼綱(僅に定家の染筆(文暦二年五月二十七日)せしもの上古より)。○孔、龔先生 柳蔭新話(浮世床初篇(文化八年)の中)からとる。○殘念関子齋 論語、先進に「德行顔淵関子齋」とあるもの、語呂。○夙に起き 孝經の句。○表徳 語原は支那にあるが、俳人の號を表徳と云ふからこゝで。○王肅 此の故事、西陽雜俎(唐の段成式)に異名の意。○讀書丸 山東京傳の家で賣つた薬の名、「加減朱子讀書丸」



神經衰弱 症の藥。○箒千里 詩云邦畿千里、惟民所止(論語から) ○留は 富潤屋、徳潤 身(論語) ○松に大夫 始皇が俄雨に遇つて松の下に避けた、そこで松を封して五大夫とし ○蟻鳳 大阪屋小三郎。三絃弾き。晩年竹本播 ○八人藝 右足で太鼓、左足で鉦、口で笛(又は唄)左手で鼓(又は胡弓)右手で三味線と琵琶を交々弾はれ。寛政文化の頃最も盛んであつた。「風流八人藝」は天明中、川島哥命が江戸で演じたこと、はその弟子か ○今昔物語 毎春正月二十一日、兩國尾上町柏屋五郎方で話し初めの會をした(話し初め)は「放し初めで縁起が悪いとて、宇治拾遺物語」とか戯作披講とか呼んだ。宇治拾遺から今昔物語に轉化するに自然であらう。○朝寝坊 里見衛。淨るりから落語家になつた。珍重亭夢樂と號し、文化三年(五十五)歿 ○林屋正藏 怪談嘶の祖、天保三年六月五日、六十二 歿 ○圓生 三遊亭圓生、初め山遊亭猿生と云ふ芝居 ○でんぼう 淺草傳法院の者は、そであつた。それから無錢見物人をしてんぼうと云ひ、さう云ふ事をえてする ○岡白駒 播磨の人、勇み肌の無頼漢を云ふやうになつた。淺草奥山見世物認可は寶曆八年。 ○岡白駒 醫を業とし、後、京に出て、儒となる、字千里、 ○可樂 三笑亭可樂、通稱京屋又五郎。三題嘶の元祖龍州と號す。明和七、十一、八歿、七十六、 ○可樂 であり、落語界に一期を劃した男。將軍家齋一に召された。天保四年三月八日、五十七で逝く、その ○助高屋 二代目高助のこと。享和元年に一世一代をした。 ○夷狄に 中府の句、「郷に入つては童子教の句。」 ○衆人濁酒 風原「漁父辭」をもちつたもの。

青 水 無 月

和 歌 四 (化政前後)



## 青 水 無 月

山かげの青水無月の江の水につりする小舟涼しげに見ゆ  
 響き来る松の嵐に埋もれて絶間がちなる谷の水音  
 時來ぬと早苗とりく出てはて、田中の里は夏ぞさみしき  
 粟田山ふもとの粟生色づきて薄ざりなびき秋風ぞ吹く  
 わが如や老いて勞れし賤の女がおくれて歸る小野の山道  
 波となり小舟となりて夕暮の雲のすがたぞはては消えゆく  
 里の犬の聲のみ空の月にすみて人は静まる宇治の山かげ  
 うづまさの深き林をひききくる風の音すごき秋の夕暮  
 松に吹く風も嵐になりにけり北窓ふたげ冬ごもりせん

小澤蘆庵 通稱帶刀、名は玄仲。尾張に生れたが、早く京阪に移り晩年は京の岡崎や太  
 秦で暮した。初め冷泉爲村に學び、後一家をなし平明な言葉で自然の感情そのまゝを詠  
 出する事を主張し「たゞこと歌」を説いた。その結果清新の調を歌壇に植ゑつけたがど  
 かすると平板の弊も伴つた、大體に於て敘景に於て卓越してゐた。「六帖詠草」はその集  
 である。享保元、七、十一、歿。年七十九。因に蘆庵、菴溪、慈延澄月を當時京都歌界  
 の四天王と云つた。

上田秋成 (前出) 家集「藤葉冊子」がある。

清水濱臣 江戸の人。通稱玄長。泊酒舎と號す、醫家であつたが學を春海に享けた。元來

文章家で歌もそれから發足してゐる、歌集を泊酒舎集。又元祿以後の長歌を編して近葉  
 菅根集と云ふ。文政七、八、十七、歿。年四十九。

香川景樹 鳥取の人。本姓荒井氏。通稱眞十郎京に出て香川景柄の養子となつた、しか

し、家の歌風に慊らず、去つて桂園派を樹立した、蘆庵の歿年に景樹は三十四の壯年で  
 あつた。彼も自然の表現を主張して、蘆庵に一步を進め、抒情敘景共にすぐれて、近世  
 の大歌人と云ふを妨げない。家集に「桂園一枝」があり、註解に「古今集正義」がある。天  
 保十四、三、二七歿。年七十六。

熊谷直好 周防岩國の人。通稱十八。景樹の門下。文政八年、大阪に來り住んだ、家集

「浦のしほ貝」がある。文久二、八、八、歿。年八十一。

木下幸文 備中長尾の人、通稱民藏。京の岡崎に住み又大阪にもゐた。亮々舎と號した。

抒情歌人としてすぐれ、その貧窮百首には直情の流露を見る「亮々遺稿」がある。文政四  
 十一、二歿。年四十三。



おもふこといはで止まめや心なき草木も風に聲たつるなり

——「小澤蘆庵」——

柳もえ蘆つのぐみて津の國の長柄の堤人のゆきかふ  
紀の海や南のはての空みれば潮げにくもる秋の夜の月  
みぞれふり夜のふけゆけば有馬山出湯の室に人の音もせぬ  
杉が枝を雲は走りて吉野なるかしの尾上にはだれ雪ふる

——「上田秋成」——

葦咲き鈴菜はなちる春の雨に心ある人や野路をわくらむ  
夏しらぬかげもありけり大比叡や横川に通ふ杉の下みち  
みそぎせしあら川柳一葉ちり二葉流れて秋風ぞ吹く  
釣の糸に吹く夕風の末見えて入日さみしき秋の川づら  
卯杖つきかゆ杖とりて玉だれのをすの内外に遊ぶ春かな

——「清水濱臣」——

朝こほりさけたる澤になくたづの聲大空にかすむ春かな  
妹と出で、若菜つみにし岡崎の垣根こひしき春雨ぞふる  
河岸の根白高萱かせふけば浪さへよせて涼しきものを  
残りなく松の姿はあらはれていまだはなれぬ山の端の月  
富士の根を木の間くにかへりみて松のかげふむ浮島が原  
埋火の外に心はなけれども向へは見ゆる白鳥の山  
めせやめせ夕げのつま木めせやめせ歸るさ遠し大原の里  
空にちる鳥の一羽のかろき身をおき所なく思ひけるかな  
若草を駒にはませて垣間みし少女も今は老いやしぬらむ  
燈火の影にて見ると思ふ間に文の上白く夜はあけにけり

——「香川景樹」——

何をして一人心を慰めむ時雨は寒し來る人はなし  
おそくそく皆わが宿に聞ゆなりとこころくの入相の鐘



別れつる涙のひまに一目みし松原越しのあけがたの浪  
世の中は寝てもおきてもありぬべし烟はのぼり水は流れて

——「熊谷直好」——

遠くゆく人を送りて休らへば堤の柳うちかすみつゝ

遠近に門さしこむる聲すなり涼みする夜はふけやしぬらむ

こゝかしこ岸根のいばら花咲きて夏になりぬる川添の道

かにかくに疎くぞ人のなりにける貧しきばかり悲しきはなし

人のいふ富は思はず世中にいとかくばかりやつれずもがな

大丈夫のをのこさびすと打あげて泣かぬ心ぞまことかなしき

今はとて垢つき衣ぬがめどもあらためきべき新衣もなし

終にはと思ふ心のなかりせば今日の悔しさ生きてあらめや

我宿に何のよろこびうるさく門さしこめてなしと云はばや(新年)

我命いましてしかせ黄泉にます親のみことに待たす苞なし

——「木下幸文」——

註 青水無月

文化文政前後に互る歌壇の代表者の作を集めた。蘆庵景樹は當時京都を中心とする新歌風で、真淵の萬葉復活の反抗運動である。秋成と濱臣とは、それらの師弟關係は真淵の系統にあるが歌は、千蔭春海等の江戸派の格調である。幸文、直好が景樹(桂園派)門下の後足である事は云ふまでもない。年代から云へば直好は、江戸末期に入るか門流の點で、こゝに附記し。○卯杖 禁中で悪鬼を避くるとして、正月の上の卯の日に、五

た。○卯杖 尺三寸に切つた木を二本又は四本一束にして奉る。○かゆ杖 正月十五日、粥

木を削つて作る、この杖で子のない女の

腰を打つと妊んで男兒を生むと云ふ。○かにかく。この歌以後七首は、貧窮百首の中から採

の詠、幸文が三十

○終には

借金取のためにひどく輕蔑された時の心持を歌つたらしい。

歳になつた時。



太  
田  
南  
畝

夏 香 旅  
す  
久 が  
草 山 花



南畝、名は覃、通稱直次郎と云つた。寛延二年御徒組の子として生れ、その修養は漢學と武藝とにあつた。十七歳(明和二年)父の職を繼ぎ、公吏としても成功した。寛政六年昌平校の試験に經史文章を優秀の成績で登第し、或は大坂の銅座に或は長崎貿易の監督として出張したりした。六十二歳で致仕して悠遊の日を送り、七十五歳即文政六年四月六日で歿した。彼が文藝上の才氣は天分であつて、多面多藝、端睨すべからざるの概がある。狂歌に於ける四方赤良、狂詩に於ける寢惚先生、狂文學界の蜀山人の名は、兒童走卒の耳にも熟してゐた。彼れの學は決してこの戯作方面のみならず、和漢學の造詣もまた、深かつた。しかし奔放不羈の才筆は時に輕きに失して野卑が伴ふ。當代の儒者が彼の學問の純でないのを惜しんだのはその一面である。けれど戯作者即ち當時の創作界から見た南畝先生は頗る偉大であつた。彼の名聲は、この中流以下の社會に天日の如く輝いたのである。ともあれ、快速な文章家、洒落なる文人として近世文學は彼の業績のために讃へればなるまい。「四方のあか」「四方の留粕」の狂文學、「百首狂歌」「狂歌百人一首」の狂歌集「千紫萬紅」「萬紫千紅」の雜集、その他、隨筆、考證類は極めて多い。

## 旅すかた

島田の宿には挑灯松明星のごとくかつげて、河原にむかふ。藤枝の邊より雨少し降り出しが、こゝに至りて西風はげしく、空は墨を摺りたらん様なるに、雨さへ降りまさりぬ。輿は蓮臺の上に結びつけて高くかゝげ、たい松打振りて、河上の方に歩み行く。河原の石の音鳴渡りて物すごきに、諸人よいとくといへる聲を出して、高くかゝげ行くめり。聞しにも似ず河の水退せて、思ふ様にむかひの岸に著く。また河原を右へ、土橋を渡り、足な踏み過ちそ、など互にいましめて、くらき道をたどりく、挑灯の光を頼みて金谷の宿に著く。酉の時半過ぐる比なるべし。宿を松屋十右衛門といふ。名におふ大井川も安らかに越したりと思ふも嬉しく袂かつぎてふしぬ。(是より遠江の國なり)。



昨夜の雨はれて、朝の風ひやゝかなれば、衣をかさねて出づ。金谷坂をのぼる。道ここに險し。こゝは初倉山といへる所なりとぞ。坂の上より右の方を見れば、金谷の驛の人家、眼の下に見えて、昨夜渡りし大井川の流も見ゆ。坂を下れば橋あり。名におふ菊川なり。「東鑑」に、佐々木盛綱が鮭の楚割に小刀をへて鎌倉殿に奉りし事。承久の年中御門中納言宗行卿、吾妻を下るとて、硯乞ひて宿の柱に書きつけ給ふ事。「東關紀行」に、その家を尋ねるに火の爲に焼けて、かの言の葉も残らぬ由、源光行がかける事まで、思ひ續けてつと胸塞がりぬ。橋のむかひの、左の岸に、紅白の色の一枝に咲きまじりたる桃の花盛なるを見るに、けふは彌生三日なりけり。昔は山陰の蘭亭に永和三日の宴をひらき、今は海道の菊川に享和元年の春を祝ふ、と利口して過ぐるに、また小さき橋あり。菊川の流のめぐるなりと聞くに、曲水の事も思ひあはせらる。輿より下りて菊坂をのぼる。俗に青木坂といふ。

圓位法師が「命なりけり」と詠みし小夜の中山を越ゆるに、今年はじめの旅

なれば、「嬉しきも憂きも忘れて」と宣ひし鳥丸光廣卿の、春のあらしも今までのあたり聞く心地す。山中の家にて飴の餅を齧ぐ。「小夜中山敵討由來」「夜啼石の縁起」など事々しう書きたるものあり。一年湯島の天神にて開張ありし時求め置きたれば、見もやらず。その子育の観音堂のは、道の傍にあり。右の方に高く見ゆる山を、無間山観音寺といふ。遠目鏡もて見せしむ。こゝより二里ありといふ。無間の鐘の事は、人普く知る所なればいはず。去年十二月の初め、唐土人あまた、舟に乗りて遠江國に漂ひ來りしを、此彌生の比、公より送りかへさせ給ふと聞く。その所は何處にか、と輿かくものに問ふに、それは横須賀といふ所にて、こゝより右の方八里ばかり隔りたる海手なりといふ。坂を下れば、道の中にたてる石あり。「南無阿彌陀佛」といふ文字をゑれるは、弘法大師の筆なりといふ。これ夜啼の石なり。

「枕草紙」に「このままの明神いと頼もし」と書き、「十六夜日記」に、「さやの中山をこゆ。事任とかやいふ社のほども道いとおもしろし」と云ひしは、延喜



式内、己等乃麻知神社なるべし。今日坂山口に在す八幡宮の事なりとぞ、ゆくての道の左の方に鳥居あり。玉垣し渡して、木立物古りたる中に、櫻の咲きかゝりぬるけしき、立入りて見まほしけれどかひなし、光廣卿の記には、このまゝの社の歌ありて、その次に「入坂を越えんとて五六町許こなたには、八幡宮あり。鳥居に櫻咲きかゝりぬ。都を立ちてこなた、今に見ざりし初櫻今日の榮これなり」とあるは、誤りて他所の社を教へまゐらせしものならん。冷泉大納言爲久卿の記には、正しく「日坂山口に在す、事任の社」と書かせ給へり。日坂の宿の家々、蕨餅を鬻ぐ、或は葛の粉に豆を和せると聞けば、伯夷がこれるものには非じかし。すべて此邊より尾張伊勢の邊までの屋作り、二階の軒の左右に小壁ありて家名を書き付けたる多し。足いたみの薬、足豆散、足瘡散など賣るもの多し。坂の下に右に入幡の奥院道あり。また無間山觀世音道もあり。左の方に魚の形したる大きな山二つ三つあり。輿かくもの戯れて、鯛山鱒山なりなど語るは、かの鯨山鯢山にや。掛川領に入れば、左に「福天權現本道」と

あり。如何なる神ならんかし。山ばなの立場をこえて、右に薬師道あり。馬喰町といへる長き町つづきに「秋葉山鳳來寺道中記」といへるものを鬻ぐ。

掛川\*の城に入れば、家ごとに葛布賣るもの多し、大手の門を右に見つゝ行くに、鴟吻くわがたなどもみゆ。折から巳の時の鼓鳴る音す、われ寛延二年己巳上巳の日に、巳の時に生れし、と母の常に物語し給ふ事思ひ出づるに、今日なん遠き所に來にけると思ふにも、父母の在せし時の事、まづ偲ばる。城下の町もつきぐし。ある店先に「三體詩」の古き本あるを見る。これまで小田原駿府の城下をも經しかど、書物鬻ぐ家を見ず。海道はじめての奇觀なるべし。

——「改元紀行」——

## 香 久 山



いかほどの洗濯なればかぐ山で衣ほすてふ持統天皇(持統天皇)

鳴く鹿の聲聞きたびに涙ぐみ猿丸大夫いかい愁たん(猿丸大夫)

仲麿はいかいはぶしの達者もの三笠の山にいでし月かも(安倍仲麿)

これまでは漕出けれどもことづてを一寸たのみたい海士の釣舟(參議寛)

吹きとちよ少女の姿暫とはまだ未練なるむねさだのぬし(僧正通照)

陸奥のしのぶもち／＼わが事をわれならなくになど紛らす(河原左大臣)

行平は狐のまねをしられけり、まつとし聞けば今歸りこん(中納言行平)

とし行といふはもつとも住の江の岸による波顔による波(藤原敏行朝臣)

難波がたみじかき蘆を伊勢ならばたゞ濱荻と詠めそうなもの(伊勢)

月みれば千々に芋これ喰たけれ我身一人のすきにはあらねど(大江千里)

このたびはぬさも取敢ず手向山まだその上にさい錢もなし(菅家)

山里は冬ぞさびしさまさりけるやはり市中がにぎやかでよい(源宗子朝臣)  
誰をかも仲人にして高砂の尉と姥とのなかよかるらん(藤原興風)

召せといふわが菜の聲は立にけり人知れずして春になりしか(壬生思見)

またしてもじよとばよこのくりごとに昔は物を思はざりけり(中納言敦忠)

すく人の絶えてしなくば眞桑瓜皮をもみをもかぶらざらまし(中納言朝忠)

由良のこを渡る舟人菓子をとへお茶のかはりに鹽水を飲む(曾禰好忠)

八重もぐら茂れる宿のさびしさに惠慶法師のあくび百遍(惠慶法師)

花見んともちしさゝえをぶちおとし碎けてものを思ふ頃かな(源重之)

御かき守衛士のこく屁によし宣か鼻かゝへつゝ物をこそ思へ(大中臣能宣朝臣)

名ばかりは五十四帖にあらはせる、雲がくれにし夜半の月かな(紫式部)

大江山いく野のみちのとほければ酒呑童子のいびききこえず(小式部内侍)

眼と口と耳と眉毛のなかりせばはなより外に知る人もなし(前大僧正行尊)

友もなく酒をもなしに眺めなばいやになるべき夜半の月かな(三條院)

夕されば門田のいなばおとづれて權兵衛内なら一合やらうか(大納言經信)

焼つぎにやりなばよしや此徳利われても末にあはんとぞ思ふ(崇徳院)



郭公なきつるかたにあきれたる後徳大寺がありあけのかほ(後徳大寺左大臣)

思ひ侘び借も命はあるものをうきにたへぬはなんだべらぼう(道因法師)

夜もすがら物思ふ頃は明やらであらふものなら世界くらやみ(俊惠法師)

何ゆるか西行ほどの強勇が月の影にてしほしほどなく(西行法師)

○むらさめの道のわるさの下駄のはにはらたちのぼる秋の夕暮(寂蓮法師)

玉の緒よ絶えなば絶えねなどといひ今といつたら先お断り(式子内親王)

きりくすなくや霜夜のさむしろに後京極殿寝たり起きたり(後京極攝政大臣)

この廣い浮世の民をおほふとはいかに大きなすみぞめの袖(前大僧正慈圓)

花さそふあらしの庭の雲ならでふりゆく者は中のきんたま(入道前大政大臣)

風そよぐならの小川の夕ぐれに薄著をしたる家隆くつしやみ(正三位家隆)

——「狂歌百人一首」より——

な つ く ら

おのが五月の雨のなごり、猶霽れやらで、名だかき雪も消ぬといふなる、日吉<sup>\*</sup>  
 の祭も近づきぬらし。あらかねの土の事用ふる頃は、暑氣の見参とて、世にか  
 かづらふ由若人など、袷がさねに麻ひきはり、戻子肩衣のかたも、雨づゝみにう  
 ちひしげて走りありきつゝ、扇ばちく〜聲づくろひし、つきく〜しからぬ時候に  
 ごきぐゑんようなど、笑ふしめたるなりの、すくわいめいて憎しや。あなうの花  
 の咲きそめしより、さなきだに心のすねすねしき、すねくさてふもの、夏草と  
 共に茂りあひて、立居るべくもあらねば、公私の事も大ながしに流い、ひたご  
 もりに籠りてのみ過い給ふ。れいの筆まめの本性なれば、すいがへしの淺草紙  
 の鼠いろなるに、手習の様にて、



此頃は世をすねくさのうみ果ててたゞ膏藥をねるばかりなり

ごくねちのさうやくにはあらで、歌のさうやくをだに得せねば、おどろの髪のおどろおどろしう、さながら大津繪の鬼かどあさましう、月代はたゞ稗時のごと高うなりもてゆくに、烏賊の甲もてつくれる鷺も立てすほしう、そこらかい撫でし爪の上の垢もしるく、汚なくも悪臭くも、哀れにもあつかましくも、虱まづ落ちぬべし。前栽の爲體、草木のたゞすまひも、何がしのえせ受領の下屋敷だつ心地して、たど／＼しき木下闇に、やぶからしのいやみ絡みて、あるじのむせうもあらはるゝに、小百合葉のほこらかに苔もたると、わすれ草の生ひいでたる、これもまた松ならねど、種しあればどうちうめかる。軒近う南天の花のさゝやかにかつ散るも、蜘蛛の巢につゝまれて露おもげなるあはれなり。誰が家に濕はらうとてたきしめし、蒼朮の烟のおもはぬ方になびきぬらん、伏籠にむせるしめしの香の、わる臭きに通ひぬるもむさし。裏ちかく水くむ姫の竹のかさ阿彌陀かふりし、かめのこに手桶うち置き車井の繩かいくり、隣のな

がしの意見いれつゝ、「あなまさなのていけや。天の底もや抜けつらぬ。出入に辛きめする、」といへば、「さなり。忌々しうしくえて焚いつかぬぞ。朝ごとの憂なり。明日のみつけの實に何よけん、」など己がじしうたへ言ふ。門守の小むすは、此方のより四つばかりもをよすがたが、さみせのこと手まさぐりて、「師にうけたる手な残い給ひそ」と母の制するに畏まり、いと黄なる聲をからびたる糸にかき合せつゝ、「尾花といふもことわりや、」とほのめかしたる、よしやあしかりとも見えず。桁はしる鼠の米の櫃かぶる心地ぞすめる。こなたの聞きとりわざに、聲作してまねび出づるを、「あながま」と母の止むれば、三つになれるおとの同じ如うこと叱るもらうたし。「あこはしゝ未だせじ、こちへ」と引寄するに、否といひ驅出でんとするを、からうじて引留めつ、やをら手をやれば、例の漏しつ。やがて濕りたるもの脱ぎかへさせ、さきの伏籠にうちきするにぞ、臭さもうち添ひ侍りて、鼻持もならぬものから。



註

(一)旅姿 享和元年東海道を旅せし時の「改元紀行」(寛政元年刊)の一節。○宗行 承久胤の謀士の一人「昔南陽縣菊水汲下流而延齡、今東海道菊河、宿西岸而失命」(吾妻鏡、卷二十五、承久三年七月十日の條)。○昔は 晉の王羲之、永和九年三月三日、會稽山陰の蘭亭で曲水の宴を開く。○命なりけり 年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なり。○うれしき 嬉しきもうきも忘れて今ぞきく。○無間鐘 觀音堂の鐘なり。○うれしき 春の嵐の小夜の中山(光廣)。○伯夷 周の武王の時、首陽山にたつくと無限に金が得られると共に無間地獄に墜つると云ふ俗説がある。○伯夷 かくれ蕨をとつて食ふ。○鯨山 雄鯨山、雌鯨山の邊の山の神に美しい娘があつて龍神が懇望した。山の神は承知しない。龍神は鯨を使としてむりに伴れやうとしたのを山の神が鯨を取り殺して了つた。○掛川城 此古へ今川氏眞の籠れる城なりとぞ、今の執政太田備前守殿(資愛)の城なりとの文句がこゝにある。(二)狂歌百人一首 天保十二年刊、その中よもちりた。○香久山 天保十二年の「狂歌百人一首」から抜いた。○むねさだ 僧正遍昭は俗名長峰宗貞と云ひ仁明帝の崩御(嘉祥三年)によつて出家した。○名ばかり 源氏物語五十四帖の内、雲隱(文化五年)の中から、擬古文を採り出して見た。○日吉 總町日吉山王社の事で六月十五日が祭日。富士の雪も消えると云ふ頃。○すくはい 租僧。○すねくさ 腫瘡。○大津繪 大津の繪師又平の畫いたと云ふ漫畫。○種しあれば 岩にも松は生ひにけり戀ひをし戀ひは逢ひざらめやは(古今集、十一) ○ていけ 天氣

小林一茶

「おらが春」抄  
やせ蛙



## 「おらが春」抄

こぞの夏竹植うる日の頃、うき節しげき浮世に生れたる娘、愚にして、ものにさとかれとて、名をさごと呼ぶ。今年誕生日祝ふころほひより、てうちくあは、天窓てんく、かぶりく振りながら、同じき子供の、風車といふものを持てるを、しきりに欲しがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしやく破つて捨て、露ほどの執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつ、それも直に倦みて、障子の薄紙をめりくむしるに、よくしたとほむれば、誠と思ひ、きやらく笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうちに一點の塵もなく、名月のさらさらしく清く見ゆれば、亦なき俳優見るやうに、なかなか心の皺を伸ばしぬ。又人の來りて、わんくは何處にとい

一茶は通稱、彌太郎と云ひ、信濃水内郡柏原と云ふ寒村に水呑百姓の子として生れた。六歳の時母に別れ、繼母のために惨ましい日を送つた。十四の時江戸へ奉公へ出たがよみへのない生活であつた。かうした間に俳諧の道を進んで素丸や成美の教をうけた。下谷坂本に住して俳諧寺と號したが文化十一年に國に歸りさやかな家の主となつた。五十越しての結婚も決して幸福ではなかつた。かくして虐げられた六十五年の一生を過して文政十年十一月十九日に瞑目した。東西の文學史上、一茶ほど現世的不幸な人があるまい。彼れの俳境は凡てその悲惨な生活の反映である。詩品が時として野卑に感ぜられるのはそれがためである。しかし、よく見れば野卑でも何でもない、生きたなま／＼しい心の迸りが、そのまゝに表現されたのである。特に世間並の弱きもの、子供とか蟲とか小鳥とかに與へたあふる、計りの同情は、彼によつて初めて崇高な敬虔な心持にまで引上げられた。俳人としての彼の地位は獨自のものである。



へば、犬に指ざし、かあ〜はと問へば鳥に指ざすさま、口許より爪先まで愛嬌こぼれて愛らしく、いはゞ春の初草に、胡蝶の戯るゝよりもやさしくなんん覺え侍る。このをさな、佛の守したまひけん、逮夜の夕暮に、持佛堂に蠟燭照らして、鈴打鳴らせば、どこに居ても、いそがはしく這ひよりて早蕨の小さき手を合せて、なんむ〜と唱ふ聲しほらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝なり。それにつけても、おのれ頭には幾らの霜を戴き額にはしば〜波の寄せ來る齡にて彌陀たのむすべも知らで、うか〜月日を費すこそ二つ子の手前も恥しけれと思ふも、其の座を退けば、はや地獄の種を蒔いて、膝にむらがる蠅を憎み、膳をめぐる蚊を誹りつゝ、あまつさへ佛の戒めし酒をのむ。折から門に月さして、いと涼しく、外に童部の踊の聲のすれば、直に小椀投げ捨て、片ゐざりにゐざり出で、聲をあげ手眞似して嬉しげなるを見る、につけつゝ、いつしか彼をも、振分髪のためになして、踊らせて見たらんには、廿五菩薩の管絃よりも、遙かに勝りて興ある業ならんと、我が身につもる老を忘れて、憂さをなん

はらしける。かく日もすがら、男鹿の角の束の間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び疲れるものから、朝は日のたけるまで眠る。其の内ばかり母は正月と思ひ飯炊きそこら掃きかたつけて、團扇ひら〜汗さまして、閨に泣聲のするを目の覺むる相圖と定め、手かしく、抱き起して、裏の畠に尿やりて乳房あてがへば、すは〜と吸ひながら、胸板のあたりをうちた〜きて、にこにこ笑ひ顔をつくるに、母は長々胎内の苦しみも、日々襦袢の穢らはしきも、ほとく〜忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに撫でさすりて、一人喜ぶ有様なりけらし。

蚤の跡かぞへながらに添乳かな。

「親のない子はどこでも知れる、爪を啜へて門にたつ」と子供等に唄はるゝも心細く、大方の人交りもせずして、裏の畠に木萱など積みたる片陰にせぐくまりて永の日を暮しぬ。わが身ながら哀れなりけり。



われと来て遊べや親のない雀

六歳 彌太郎

樂しみ極りて愁ひ起るは浮世の慣ひなれど、いまだ樂しみ半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみどり子を、寐耳に水の押し來る如きあらあらしき痘の神に見込まれつゝ、いま水腫のさなかなれば、やをら咲ける初花の、泥雨にしをれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日経たれば、痘はかせぐちにて、雪解の峽土のほろ／＼落つるやうに、瘡蓋といふものを取れば、祝ひ囃して、さんだら法師といふを作りて、湯笹浴せる真似かたして、神は送り出したれど、ます／＼弱りて、きのふより今日は頼み少なく、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、此の世をしぼみぬ。母は死顔にすがりて、よ／＼と泣くもむべなるかな。この期に及んでは行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなどと、あきらめ顔しても、思ひきりがたきは恩愛のきづななりけり。

露の世は露の世ながらさりながら。

二十七日晴、坊守朝とく起きて飯を炊きける折から、東隣の園右衛門といふ者の餅搗なれば、例の通りきたるべし、冷えてはあしかりなん、ほか／＼湯けぶりの立つうち賞翫せよといふからに、いまや／＼と待ちて、飯は氷の如く冷えて、餅は遂に來ずなりぬ。

わが門へ來さうにしたり配餅。

——「おらが春」——

やせ蛙

やせ蛙負けるな一茶是にあり



雀の子そこのけくお馬が通る  
寐返りをするぞ脇よれきりくす

罷り出でたるは此藪の墓にて候  
やれ打つな蠅が手をする足をする

下駄ころりからり彼奴等が夕涼

大根引大根で道を教へけり

鳴く猫に赤ん目をして手鞠かな

\*これがまあ終の栖か雪五尺

大寺は留守の體なり夏木立

\*蚤焼いて日和占ふ山家かな

\*近づきの樂書見えて秋の暮

—「一茶俳句集」—

註

(一)おらが春 一茶の心の記録である。一卷  
嘉永五年に刊行された。

○二十五菩薩

念佛の行者を擁護すると云ふ觀音、勢至、藥王など二十五佛を

云ふ。人往生すれば紫雲に乗じて來迎すると云ふ。

○さんだら法師

米俵の兩端の蓋として用ゆる藁製の圓く平たいも機俵の事。但、こゝは藁人形を作り痘瘡神と

して病除けのために送り出したのである。

(二)やせ蛙

一茶の句集から採る。嘉永元年の刊行。

○これがまあ

文政十一年十二月二十四日故郷に入る。

○蚤やいて

俗説に蚤を火にくべる時、大きな音をしてはげると明日は天氣とする。

○近づき

善光寺の本堂の柱に舊友の名を見出した時の作。その友は三十

年も會はぬ長崎の人で、日附が一茶の参つた前日であるので一層なつかしく昨日來たらばとて悔しがつた。



石  
川  
雅  
望

兩  
國  
の  
橋



## 兩國の橋

大江戸より本所へわたしたる橋を兩國の橋とぞ呼ぶ。いにしへこの川よりを  
 ちは下總の國なりければ、しか名づけたりと或人いひき。在五中將の遠くも來  
 にけるかなと佗び給ひし隅田川は、此上の瀬にして、淺草なる大悲者もこの流  
 れより取上げ奉りけるぞ。富士の嶺はさらなり、<sup>\*</sup>ますかげはなしと詠める筑  
 波の山も、手にとるばかり見ゆ。そこら行きかけ舟の多かるは、たゞ柳の葉を  
 こき散したるが如し。夏の頃は殊に舟あまた集ひて、絲竹の音川波にひき合  
 ひて、おそろしきまで聞ゆ。げに廣き都の中にも、なぞらふべき所だになく、  
 こよなう賑しきわたりになん。川面には葭を編てへだての垣となし、<sup>\*</sup>賣子だつ  
 物あまた並べて、いこふ人ごとに茶をもてあきなふめり。又同じつらなる假家

雅望、名は五郎兵衛、字は子相、六樹園と號した。江戸小傳馬町の旅屋糠屋七兵衛の子であ  
 る。父は石川豊信と號した浮世繪師であつたから藝術的天分も遺傳する所があらう。雅望  
 は、漢學を、古屋普陽から、和學は津村濠菴から享けたが、大方は獨學したものである。そ  
 の造詣の深さはその著作に十分に現はれてゐる。家運が逆境に立つたので一時内藤新宿や  
 靈岸島に卜居して讀書に耽つた。階級制度の時代として、學問はありながら世に認められる事  
 もなかつた。狂歌師としての宿屋飯盛は或はその不満の安全瓣であつたかもしれぬ。狂文  
 「あづまなまり」、奇談集「しみのすみか」、また「吉原十二時」の如き孰れもその方面のもので  
 ある。雅文小説「近江縣物語」「飛騨匠物語」は作家としての技能を語り「雅言集覽」「源註餘  
 滴」は學者としての地位を語るものである。もし文章家としての彼を見るなら圓轉洒脫の筆  
 致を以て縦横に描破し、所謂「和文の廻りくどさ」から解放されてゐる。この點で春海と共  
 に當代の名手と云ふ事が出来る。古語を駆つて痒い所へ手の届くやうな書振りはこの人獨  
 得の壇場と云はればならぬ。天保元年正月十四日、享年七十八で逝いた。



つくりて、小弓の射場まうけて營とするものもあり。髪つかぬる家、舟貸す家、もちひ、くだもの酒うる軒など、所狭きまでたち並びたり。すべて名高き商人の家々は、かぞへ盡すべうもあらねば、うちおきていはす。此大路の中に、菰簾かけ假家つくりて、外の方にあやしき繪をかきてかゝげたるあり。肩ぬぎたる男の、戸口に立ちて口に手をあて、聲だかく呼びいへるは、「こは丹波の國なる奥山にて捕へつる山あらししてふ獸なり。世に稀有の物なり。前代未聞、又たぐひあらし。家づとによき物語のたねぞ。見たらん後に錢おこしね。」と聲かゝるゝばかりのゝしる様に、むさゝびの大きなをとらへて、斯る誇らしげにいふなりけり。その隣も同じすぢなる假家つくりて、薄衣かづきたる女子を高さ所にすえて、うしろには白き青き紙をへだて彩りたる明障子をたてつ。添ひ居たる男の、扇さかさまにとりて、まづしはぶきを先にたてゝ、見る人に向ひていへらく。「此女子こそ、越の國なしがしの村なる狩人の子なれ。殺生の罪の子にむくい侍りて、斯うあやしき身とは生れたり。されば十が一つ罪障の消え

うせなんよすがともなれどとて、こたび率て来て、あまねく人々に見せ奉るなり、」とて、かの薄衣をさりのけつれば、げにいひしに違はず、顔より手足まで一面に黒き毛生ひ續きて、目鼻のつき所さへわかたず。熊女と名づけつるも理にこそと、人々うちまもりあざむ。「斯るかたはにさへ生れたゝるを、かゝやかしう人あつめて見することよ。彼女いかに佗しとや思ふらん。汝が名はいはじ」<sup>\*</sup>とうちはぶれて出でぬ。むかひたる家は、ことに人おほく集り居り。こは女子を六七人あつめて、ふこといへる今様のうたひものを歌はす。こはあだくしき男女の、めそか事せるがあらはれて、せんすべなく、互に死なんど契り語らひし事などあるを、かゝる節物にあやなしゝなり。此頃世の中ゆすりてもてあそび興すれば、さてこゝにも斯うは設け出でたるなりけり。げに世籠りたる人などの、斯うさまの事に耳馴れゆかば、自然にあだなるすさみに心やひかれん。女子には聞かすべきものとも覺えず。又高きあぐらに上りぬて、文机のうへには拍子木のかたしを置き、ふるき世の軍物語をまねびいふ。まこと



にや偽にや。おのが目に見しごと語りなすもをかし。片つ方に入あまたつどひ立てる所あり。何ぞと寄りてのぞけば、黒き筥二つならべ、これにおほきなる太刀二つをかけ置きつ、わかき男の裾ひきあげて襷結びたるが、高足駄はきて、ついがさねのやうなる物二つ重ねたる上に乗りて、この太刀をひき抜き、さまざまに打振りて、とみに鞘にをさめなどす。さすが見えたる男、これも襷ひき結びて、これはいますこし短き刀をぬきて、ぬしと打合ふまねをす。さてかの人のいへるは、「かゝる太刀打のわざは、たゞ諸人の目を喜ばしめん業なり。まこと我家のいとなみは、薬ひさぐ業にこそあれ」とて、さゝやかなる紙つゝみ二つ取出て、此一つは返魂丹といひて、家に傳へたるらうやくなり。あだはら、あくたの病、或は尻より口よりこく病、舟やまひ、酒やまひ、いづれに用ひても頓にしるしあり。又こなたなるは、齒をみがく薬なり。此薬むしかめ齒をいやし、口の中のくさき香を除く。齒を白くせんことは、殊にすみやかなり」など、いひつゝ、錢一つを彼の薬もてみがくに、十日の月の雲間をいづるがごと照り

かゝやきて見ゆ。皆人おのがじしもごめつゝ去ぬ。こなたなる葎のかこひの中には、乞食の頭巾をきたるが、扇を襟のあたりにさして、上中下の人のうへを面白くまねび語る。うしろの方に、わかき女三四人ならび居て、かい弾きうたふ。そばかりありて錢もとむとて、弾きさし立ちて、小さき籠を人の胸乳のあたりへ持て来てふりうごかす。つれなしづくりて、錢もやらで出で、行く人あるを、かの乞食見て、「權兵衛の尉きたなし。まさなうも後を見せ給ふか。馬かへされよ。をうく」と呼ぶに、皆人わらふ。さてかたみなる錢かぞへ見て、「あなうれし、百ばかりあつまりて侍り。いみじき御惠になん」などいひて、缺けたる錢、一つ取出て、「これ御覽せさせ給へ半ばかりになりたり。物惜みし給へる人のかゝる物取出てたびぬ。これもて歸りて鑄物師にあつらへなば、六七文の錢やつひやさん。あなやうなし」などいひて取隠しつ。「さてもますかげもなき君達の御蔭によりて、餓えず寒からず、世をいとなみ侍り。常も妻子なるものを教へいさめていへらく。かならず殿ばらの御惠をあだには思ひそ、



ひとへに親とたのみ奉れとこそいひつけ侍りしか。よう思へば、おのれが親と聞え奉るからは、君たちの爲に、おのれは子にて侍り。さばかりよき子をもたせ給ひて、世のきこえ面目やおはすらん」などといへば、人また例のどよみ笑ふことかぎりなし。さてそこを出で、さまよひ歩くに、人形を頭より手足まであまたの絲もてつけて、うたひ物に合せて、絲引きあやどり使ふを南京のあやつりと名づけて、むかしよりこゝにて行ふ。をさなき者は皆これに心よせつゝつどひ寄るめり。柳の橋の方に添ひて、殊にたかやかに假家つくりたるあり。京くんだり某の大夫と、いかめしく旗に書きたり。これも外の方に繪をあまた書きてかゝげ置きつ。入りて見れば、袴をばぬぎて上ばかり着たるもの三人ばかり笛鼓うちはやす。耳もとにいさゝか鬢の髪のこして、頭なごりなう剃りすてたる翁の、おなじごと上ばかり着たるが、見る人に向ひてざればみさへづりいふ。かの大夫、頭に鉢巻といふもの後さまにむすびて、手足みな赤き絹におしつみて、半臂のやうなる物着て出で來たり。見る人にむかひて、ひざまづき拜

して、さて太く長き竹の三丈ばかりもあらんと見るを中に立てゝあるに、すらくゝと上りて、竹のうらに身をこゝめて、扇取出てうち煽ぎたるさま、いとやすぎなり。竹は右、左になびきて、いまや落ちなんと、見る人心をのゝき目くれてあやぶみ思ふに、竹を膝にからみて居るさま、常の人の地に坐したらん如し。さて或は立ち或は伏しあふぎて舞ひ、そだちて踊る。そばのさま一方ならず。これにて様々の名あり。かの翁笛鼓にあはせて指さしいふ、その曲の名は、

達磨大師の坐禪のゆか

野中に立てるひともし杉

からしゝの洞の出で入り

東山の大の字

梢つたふさるまろ

餌落したるやまがら

住の江のそりはし



松に這ひたる藤波

猶こゝらあめり。さて長く引きはへたる綱の上を、傘さしてわたる。ながき紙の上をもわたりに、みな足ぶみを拍子にあはせて踊る。見る人あざみ興せざるはなし。事果てぬれば、したゝかに大鼓うちならして、「もと見し人はかはりね」と呼ぶ。遣戸一つあけて人出すに、押しあひて出でもやられず。ほとゝしりなる人に靴も踏まれつべし。むかひなる川づらには、水にひたりて十餘人ばかり聲そろへて何事にかあらん。高らかに唱ふ。こはおもきばうざを救はんぞと、垢離といふ事おこなひて、相模國なるあふり山の不動尊にねぎ祈るなりけり。手ごとにわらしべを持ちて川になげうつ。流るゝをよしとし、たゞよふを悪しとするなん。こと果てぬれば、おのがじし衣着さわぐに、猶若きものは、こなたかなたうかび、かづき出でゝ遊ぶもいとあやふし。すべてこの橋の前うしろには、ひまもなく商人の家立ちこみて、大君來ませと呼ばへる軒には、鮑さだをかきらくしう、われもの申すといひたる家には、夏瘦によき鰻もあり

ぬべし。あるは虎てふ神を木もて作りする、又あらたまを障子に畫きて、外の口に立てたるもあり。いがらしと名のるものゝ家にさしむかひて、破れたる芭蕉を壁にゑがきたるは、つきゝしう見ゆれど、おぼろといへる豆腐ひさぎて、あかしと名のりたるは如何ぞや。此ほか餅を幾世の名にことぶき、煎餅を羽衣の松になぞらふなど、取出でゝ數へいはんも、言の葉たるまじうぞ覺ゆる。かかるあたりを經めぐらひて、まゝと共に遊びさまよひしも、はや四十年の昔とぞなりにたる、げに年月のながれ早きは、この川の瀬に劣らざること、夢のわたりの浮橋をわたりくらべし人は知るべきにこそ。

—「都の手ぶり」—

註 都の手ぶり

江戸市中の風俗の一面を雅文もて描いたもので富澤町の古着市、兩國橋の見世物、馬喰町の旅籠屋、茅場町の薬師の縁日などが見える。その内、兩國橋の條をかつた。○遠くも 此川の邊におりぬて思ひやれば遠くも來に (伊勢物語) ○大悲者 浅草金龍山の觀音。昔、筑波根のこのもかのかげはあれど君が、みかげにますかけはなし (古今集、大歌) ○夏の頃 兩弟が川中から一寸八分の尊像を引上げた俗説 ○ますかけ



の川開、五月二十八日。それから八月二十八日まで。今は八月一日前後。○葎をあみの水茶屋のさま。小弓の射場は矢場の事。○なが名住むといふ山のしほせ山、せめて云ふとも汝が名はのらじ。萬葉卷 ○ふこ 豊後 ○黒き宮 享和の十一の戀の歌。こゝでは、お前の事は人に話すまいの意。○腹痛。因でにあくた(蠅蟲)、尻屋源左衛門の初めた、齒みがき賣が、居合抜。○あだはらより云々は、霍亂即吐き下し、尻などして人寄をした、その流儀である。○京下り 竹渡り綱わたりの輕業師。無三飛新藏、南京操り 風來の六々部集などに見るが、早飛梅之丞などの名が残つてゐる。

○あかざり 「あかざりむな後なる子、われも。目はあり前なる子」(神樂歌の早歌) ○あふり山 相州雨降山(大山)で、阿夫利神社の事。○大君來ませ 「わいへんは、とばり帳を垂れたれば、大君來ませ、婿にせん、御着には何よけむ、あはび、さだなか、かせ、よけん」(催馬樂歌「吾家」)即ち魚屋の店先である。

○われ物申す 石磨にわれ物申す夏やせによしと云ふものぞ。○虎てふ神 「韓國の虎てふ神むなぎとりめせ」(萬葉、十六)むなぎは鱧。○虎てふ神 「韓國の虎てふ神をいけどりて」

(萬葉十七)と云ふ文句がある。○あらたま 寶珠の事、即ち稻荷を意味し油揚の館店。○五十嵐 五十嵐兵庫とこれは虎屋饅頭であらう。○芭蕉 何店か未考。恐らく、芭蕉膏藥の看板。○おほろ 淡雪豆腐の店で、日野屋東次郎は姓は明石。(總鹿子)

○幾世餅 兩國西詰。その家の妻、もと遊女にて幾世と云ふ。(耳袋)主人は小松家喜兵衛、元祿十七年開店。尤もこの餅の元祖は、淺草の藤屋、それからこの小松屋、天保頃には兩國吉川町の若松屋と。○羽衣 普通に「松風」と云ふ煎餅で、漸次と推移した。これを羽衣せんべいと云つた。

鹽井川

十返舎一九



## 鹽 井 川

鹽井川といふ所にいたりけるに、昨日の雨つよくして、橋おちけるにや。行かふ人みづから股引をとり、すそをまくりあげて、爰をわたるに、彌次郎北八も、いざや引つれて涉りなんとする折柄、京よりの座頭二人づれ、此川の歩わりなることを聞けるにや。一人の座頭、大市「モシ、川は膝きりもございますか。な。」大市「ハア、なる程、水の音がよつぼどはやい、」ト、いひつゝ石を拾ひ、川の中へなげこんで考へ、大市「イヤ、こつらが、どうか浅いやうだ。コリヤ猿市、二人ながら脚半をさるもめんどうだ。おぬし若役に、おれをおぶつてわたれ。」猿市「ハ、ハ、ハ、するい事をぬかす。拳でまらう。なんでもまけたものが、おぶつてわたるのだ。よしか。」大市「コリヤおもしろい。サアこい、さんなむめ\*

一九は重田貞一と云つて駿府町奉行勘定役重田頼助の子である。家を繼弟に譲つて大阪に赴き材木屋へ入婿したり、淨瑠璃作者となつたが、いゝ目も出ず、寛政四五年の頃に江戸へ出て来た。寛政五年「倡賣往來」と云ふ洒落本を書いたが、翌年書肆葛屋(重三郎)へ奉公した、恰度馬琴が此店の番頭を辭した翌年であつた。その後、かなり多作を試みたが特に認められる事もなく、寛政の季、長谷川町の某家へ入夫したがこれも長つゞきせず、更に妻を迎へても、會所の留守番と云ふ貧しい生活であつた。然るに享和二年「膝栗毛」に依つて一躍文界の流行兒となつた。一九が三十九歳の時である。膝栗毛は洒落本系統の作であるが従來の遍歴小説の體をとり、資料を狂言や落語によつて諧謔縱横の作爲を試みたのである。爾後、同じやうな道中記を著したが、その範圍は東海道につきてゐた。彼の全作は二百餘種に上るが濫作の譏りを免れない。たゞ膝栗毛一篇が彼を不朽ならしめたのである。彼の人物を見るに奇行が多い、それと共にどことなく氣概も潜んで居たらしい。又すばらでのんきな半面には、滑稽作家通有の氣むづかしさもあつた。(一々例證が擧げられる)しかし一言以て云へば彼の恬淡で放縱な心から彌次郎北八は生れ出たので彼の性格の断面はそこに生きてゐる。天保二年、八月七日、六十七で死んだ。